

ISSN 0288-5913

# コミュニケーション研究

第 36 号

上智大学コミュニケーション学会

# 目 次

## 《論文》

神戸英字紙界と日露戦争 …………… 鈴木雄雅 1

放送番組「NHKのど自慢」のメディア文化研究

—マイクに唄う日本人— …………… 上智大学「のど自慢」研究会 23

植田康夫（代表）

金山智子

小寺敦之

金山 勉

米地上放送デジタル化の転換点 …………… 金山 勉 79

西ヨーロッパにおけるエスニック・マイノリティ・メディアの変遷

—ドイツ、イギリスを中心とした移民と放送メディアの関係性の変化から—

…………… 阿部るり 105

## 《研究ノート》

2.6GHz 帯衛星デジタル音声放送を通じた日韓文化融合

…………… 白 承嫻 149

## 《学位論文審査報告》

蔡 星慧「日本の書籍出版産業の構造的特質に関する考察」…………… 161

## 《学事資料》

文学部新聞学科 …………… 169

大学院文学研究科新聞学専攻 …………… 175

# 放送番組「NHKのど自慢」のメディア文化研究

—マイクに唄う日本人—

上智大学「のど自慢」研究会<sup>1</sup>

植田 康夫（代表）

金山 智子

小寺 敦之

金山 勉

## はじめに

人々が自ら発する歌声が、放送を通じて、戦後復興を目指す日本に響き始めてから60年が経過した。人であれば「還暦」、節目の年を迎えたことになる。日本の放送文化を担ってきた「NHKのど自慢」がそれである。素人が自慢ののどを、一般の人々の前で披露することに、放送事業が関わったものである。

「のど自慢」はメディアを通じたイベント、いわゆるメディア・イベントである。敗戦の荒廃した日本に活力を与えるために放送は何かができるのか。民主的な社会を実現するために放送が果たすべき役割とそれを具現化する企画を真剣に議論し、検討した日本放送協会（NHK）が生み出したのが、素人が飛び入りで参加できる音楽会だった。このメディア・イベントの原点は、

---

<sup>1</sup> 本研究は、金山智子（申請代表者：慶應義塾大学助教授）が受けた、平成15年度の放送文化基金の研究助成「放送番組『NHKのど自慢』のメディア文化研究：マイクに唄う日本人」の研究成果の一部である。上智大学コミュニケーション学会ではこれに先立って平成14年に「のど自慢研究会」（植田康夫代表）を発足させて定例研究会を開催し、①「のど自慢」と大衆文化、②放送技術の変容が番組に与えるインパクト、③「のど自慢」の内容分析（量的アプローチ）、④「のど自慢」の内容分析（質的アプローチ）、⑤「のど自慢」フィールド調査、およびパーソナル・インタビューの実践、について取り組んできた。フィールド、インタビュー調査では、放送文化基金事務局の仲介で、「NHKのど自慢」の制作関係者了解のもと、特別に放送現場での観察学習調査などの機会を与えられた。

植田 康夫（代表）

新兵が軍に入った時に開催されていた「演芸会」にある。プロフェッショナルな芸人にはない、素人らしさの中から、人々が共感できることは多くある。その部分を放送によって訴えかけ、放送によって人々を巻き込もうとした。

権威主義的な政治体制下で、自由に発言することもままならなかった日本の大衆は、「のど自慢」が放送番組として社会に提示されることにより、戦時中はプロパガンダの道具とされ、政府と一体化していたメディアが、一般の人々に開放されたことを実感させることができた。素人にとって用意された「ハレ」の舞台上、マイクに向かって唄う日本人の姿の中に、人々は明日への希望と活力を見出してきた。

番組の基本となる「素人参加」のコンセプトは、社会の中で人々があるべき姿を提示するものではなかった。人々の日常生活の中で、自分に最も近い唄を見つけることができれば、そこから唄を聞く人の主体的な関わり方が始まる。ラジオから、またテレビから流れるメロディーにあわせて自分も歌ったり、歌声から感じ取れる情感を読み取ろうとしたりさまざまな場面が想定される。「のど自慢」では、多様なライフヒストリーを持つ人々が、放送番組の送り手と共に番組制作空間に参加し、多様な受け手に対してメッセージを発信するのである。放送をみたり、きいたりする人々は、「のど自慢」の自由な解釈と楽しみ方を手にしたと言える。

大衆に向けて、さらに「のど自慢」が用意したのは「全国行脚」である。毎週日曜日のお昼に放送されるこの番組は、全国の市町村を巡回する。NHKが「のど自慢」を開催するご当地を全国に向けて発信するのである。全国各地の素人が、週替わりで登場し、自分たちの住む地域の文化や風俗までも具現化しながら、同時に「元気」を届けようとするこの長寿番組は、どのような歴史的な背景をもって生まれ、今日まで続いてきているのか。また、今日の「のど自慢」にはどのような内容が盛り込まれて、成立しているのか。本稿では、(1)「のど自慢」の歴史とその変遷、(2)「のど自慢」という番組制作の現場実態、そして(3)「のど自慢」の中に込められた番組メッセージの傾向について考察を行なう。

〔金山 勉〕

## 1 「のど自慢」の誕生

毎週日曜日の昼、午後12時15分から1時までの45分間、NHKのテレビと

ラジオで放送される「NHKのど自慢」は1946年1月19日に放送が開始されているので、今年で60年の歴史を持っている。この番組は、全てが生放送ではないが、多くが生放送され、臨場感があり、今も人気がある。

出演者は素人ばかりで、歌唱力を競うというコンセプトはずっと変わらないが、この番組は、単なるコンクールではなく、独特の魅力を多く持っている。そのため、井筒和幸監督は、1998年に「のど自慢」という映画を作ったことがある。この映画を企画したのは、李鳳宇というプロデューサーであるが、彼はこの映画を作るきっかけとなった体験をこう語っている。

・・・岡山か姫路に行ったとき、昼時の定食屋に入ったんです。お昼の時報が鳴ってニュース番組の後に「NHKのど自慢」が、その店のTVで始まりました。周りを見ていると、《のど自慢》を観ているお客さんの顔が、徐々に明るくなっていくんです。少し笑ったり、うまい人が出てくると顔を見合わせたりと、定食屋のお客さんたちが反応している。それを見て、「これはものすごく映画的だな」と思ったんです。僕はそれまで、「NHKのど自慢」をちゃんと最後まで通して観たことがなかったんですよ。それで、東京に帰ってから《のど自慢》の研究を始めたのです。<sup>2</sup>

それ以降、李鳳宇プロデューサーは、NHKのチーフプロデューサーに頼み、「のど自慢」の予選、本選を4回ほど見せてもらった。そして、「予選会で待っている人たちの風景を見たり、その人たちの話を聞いてみると、そこにはすごいドラマがある」<sup>3</sup>と感じ、「これはいけると思って、映画化に踏み切った」<sup>4</sup>という。1人の映画プロデューサーを、これほど感銘させた「のど自慢」は、彼が語っているように、「映画的」であり、「研究」に値する。そこで、「のど自慢」について、まず歴史的な面から考察してみたい。

「のど自慢」は、『20世紀放送史』上巻によると、1946年1月19日に「のど自慢素人音楽会」という名前で、ラジオの第1放送で毎週日曜日の午後4時

---

<sup>2</sup> 『映画「のど自慢」パンフレット』1999年、東宝出版：商品事業室、9頁。

<sup>3</sup> 前掲書。

<sup>4</sup> 前掲書。

植田 康夫（代表）

から30分間の定時番組として放送が始まった。この番組の特色は、「素人がマイクの前に立って歌う新しい聴取者参加番組である」<sup>5</sup>という点にあり、この特色は、今も変わらない。

では、このような特色を持っている「のど自慢」はどのようにして企画されたのであろうか。『20世紀放送史』上巻には、次のように記述されている。

この番組は、放送協会の音楽部にいた三枝健剛らが提案して実現した。協会は、戦前の愛宕山時代から毎年のように新人歌手を募集してきたが、三枝は部内でこの話が出たとき、「多少でも歌える人ならどんどん合格させて放送に出したらどうか。ズブの素人でも下手は下手なりに面白いのではないか」と考えた。そして前年の11月に『飛び入り素人のど自慢音楽会』という企画を出した。しかし、上司は素人の音程の外れた歌は聴取者には受けないと提案を却下した。三枝はあきらめずに、テストに合格した人だけを出演させる内容に改めて再び提案したところ、今度は採用された。<sup>6</sup>

#### 写真1-1 第1回のだ自慢全国コンクール（1948年）



出典：『放送文化』1999年10月号、日本放送出版協会、41頁。

<sup>5</sup> 日本放送協会、『20世紀放送史・上』2001年、日本放送出版協会、239頁。

<sup>6</sup> 前掲書、239-240頁。

こうして、番組が実現することになり、出演者をニュースで募集したが、1回目の放送には900人、2回目には1000人を超す応募者があり、「1日300人という大量のテストを行い、その合格者だけが番組に出演できた。素人にマイクを開放することと合格すればその声が全国に流れるということが人気を呼んだ」<sup>7</sup>という。そして、「番組は、その後、音楽のほかに演芸も加え、47年6月から『のど自慢素人演芸会』に題名を変え」<sup>8</sup>、「応募者のうちから150人を選び、そのうち30人のテスト風景をそのまま実況するようになった」<sup>9</sup>のである。その他に、テーマ音楽（作曲・天地真佐雄）、鐘を鳴らす演出を採り入れることによって、現在のような「のど自慢」のスタイルが作られたのである。

このうち、鐘を鳴らすという演出は、苦肉の策として考えられたものである。そのことを、初代と3代の鐘叩きである三上秀俊氏が、次のように証言している。

「のど自慢」は、昭和21年1月19日から、始まったんですね。20、30人もくればと思ったら、数百人も集った。順々に歌いますとね、みなさんがあんまり長く歌うので、「もう結構です」といっても「結構」というのは、イイ意味だと思うんですね。それで、「ヤメテクダサイ」というのも、「お帰りください」というのもおかしいから、どうしようかな、というんで、カネをチンと叩いたんですけど、夢中だから、聞こえやしませんよ。

そのうち、チューバーベルを叩いたらどうだろう、と。——初めは、一つと三つ叩いたんです。でも、合格にはちょっとショッパイけどまあまあ、というのもあるからと、二つも叩くということになったんですよ。ですから、カネを叩いたのは、4月ごろからですよ。<sup>10</sup>

三上氏の本職は、東京放送管弦楽団の打楽器奏者であった。そのため、鐘の音も、音階を決めて出すようにした。

---

<sup>7</sup> 前掲書、240頁。

<sup>8</sup> 前掲書。

<sup>9</sup> 前掲書。

<sup>10</sup> 三上秀俊「近況・心境—のど自慢とカネ持ち」『婦人公論』1979年2月号、中央公論社、328頁。

植田 康夫（代表）

初めはね、カネも、一つの時は「ド」二つの時は「ドレ」三つの時は「ドミレ」と叩いたんです。だけど、三つじゃ淋しい、と、ヤタラに叩こうじゃないかと、——その時、譜面も統一しましてね、いまのように「ドシラソ、ドシラソ」というカザリをつけて「ドミレ」となったんですね。<sup>11</sup>

放送が開始されて間もなく、このような演出が行われるようになった「のだ自慢」は、どのようなモチーフで企画されたのだろうか。この問題については、この番組の企画スタッフの中心人物となった三枝健剛氏が次のように語っている。

発想のもととはいえば、軍隊時代の新兵の演芸会にありました。歌謡曲、民謡、漫才、・・・きびしい軍隊生活の中でハメを外す会として、どこの軍隊でもやっていましたが、素人の方が専門家よりも面白いと思ったんです。素人ののだ自慢の企画を提案したのは昭和二十年の暮のことでした。<sup>12</sup>

この談話で明かされている事実は、他の媒体でも伝えられている。井筒和幸監督の映画「のだ自慢」の前掲パンフレットにおいても、「番組の発案者は、作曲家・三枝成彰氏の父である三枝健剛氏で、発想の源は、“軍隊の演芸会”だったという」と記述されている。また三枝氏が食道がんのため、享年87で亡くなった時の「お別れの会」の様相を伝える記事には、次のような事実が伝えられている。

三枝氏は明治四十三年生まれ。旧制千葉中時代に初めてピアノを見て強烈な印象を受け、苦学しながら作曲家の道を志した。

しかし、昭和元年に徴兵され、戦争がその夢を閉ざした。そして、昭和十四年にNHKに入局。以来、一貫して音楽番組の制作を担当した。<sup>13</sup>

---

<sup>11</sup> 前掲書。

<sup>12</sup> 「素人ののだ自慢第一回合格者たち」『週刊新潮』1984年1月5日号、50頁。

<sup>13</sup> 「ひばりを落としたガンコ者」『夕刊フジ』1997年3月22日、産業経済新聞東京本社、9頁。



その三枝氏は、自分のかなえられなかった作曲家になるという夢を息子の成彰氏に託し、家ではクラシック音楽しか聴かせず、成彰氏が映画音楽を手がけることを、最初はよく思っていなかったという。しかし、晩年は成彰氏がやろうとしていた作曲活動にも理解を示し、二男のNHKディレクター健起氏が監督した映画「MYSTY」の試写にも車イスで訪れ、息子たちの活躍に目を細めていたというが、この記事は、次のように続く。

そして、三枝氏が戦後まもなく手がけたのが『のど自慢』。初めて素人にマイクを開放するという画期的な番組は、軍隊での経験がヒントだった。俊子夫人（七四）は「軍隊では、毎月演芸会が開かれていて、地方から来た人が、飛び入りで民謡などを歌ったそうです。その面白さが忘れられなかったと話しておりました」と振り返る。もっとも、同局は「ずぶの素人に歌わせるのは危険」と、当初は合格者だけを放送していた。

しかし、三枝氏は「素人だから面白い」と主張。やがて、審査風景そのものを放送するようになった。この企画は大当たりで、一回の放送に八百人の出演希望者が集まり、東京・内幸町のNHKを取り囲む長い列ができた。<sup>14</sup>

実は、三枝氏が軍隊時代に見た演芸会については、大岡昇平氏の『俘虜記』の中でも描かれ、「演芸大会」という章では、戦争の終り近く、日本軍が米軍の俘虜になって収容所に入れられて以後も、演芸会が催されていたことを伝えている。それは、次のようであったと、大岡氏は書いている。

進藤の名が収容所に鳴り響いたのは、戦争も終りに近く、毎週中隊で演芸大会が催されるようになってからである。或る夜、わが中隊の俘虜達が、それぞれの流行歌やお国自慢の民謡などを聞かせた後、飛び入りで「姑娘クレーヤンの歌」を歌った。かなり音域の広い裏声で、俘虜には完全な女声と聞えた。<sup>15</sup>

---

<sup>14</sup> 前掲『夕刊フジ』。

<sup>15</sup> 大岡昇平『俘虜記』1971年、講談社、353頁。

植田 康夫（代表）

この中隊では、終戦後、俘虜達は芝居をやるようになり、演芸会はほぼ毎月2回開催されたが、「演芸大会」の章には、こんな記述も見られる。

俘虜の芸術の中で浪花節もまた無視することが出来ない。最初は少数の蓄音機名人がさわりを隣人に聞かせる程度であったが、演芸大会をきっかけに「喉自慢」程度の半玄人が続々掘り出されて来た。<sup>16</sup>

「演芸大会」という章は、1951年1月号の『人間』に「俘虜演芸大会」という題名で発表されており、その時、既に「のど自慢」は放送されていたので、大岡氏はこの番組の名前を自分の作品の中で使ったのであろう。

「のど自慢」という番組は、三枝氏が軍隊時代に目撃した演芸会に触発されて企画されたのであるが、その演芸会を、日本兵は俘虜になっても催していたのである。

こうした事実を見てゆくと、「のど自慢」という番組は、日本人の感性と深く関わっていると言えるのだが、「のど自慢」が実現するまでには、この他にも実現を促すことになる事情があった。その事情とは、日本の敗戦によって、1945年9月、NHKに乗り込んできたCIE（アメリカ民間情報教育局）が、娯楽番組に対しては検閲をあまりせず、NHKの提案どおりに放送ができたということである。そのことについて、1946年に、NHKの音楽部副部長となった丸山鉄雄氏が、当時の模様を語っており、CIEが娯楽番組に対して検閲がゆるやかだったので、1945年の秋に、まず「希望音楽会」という番組を作ったという。

あこのころ、街にはやりだした歌謡曲を、一般聴取者に希望投票させ、人気順に放送したのがこの番組。これはNHKのスタジオでは会場が狭いので、飛行館ホールや東京劇場を借りて、その後二十四、五年ごろまで続いたでしょうか。

この放送を続けているうち、音楽番組がだれからも親しまれるということを知ったのは、わたしどもにとっては大きな収穫でした。<sup>17</sup>

<sup>16</sup> 前掲書、370頁。

<sup>17</sup> 「あの日あこのころ」『週刊東京』1957年3月9日号、東京新聞社、30-34頁。

そして、丸山氏たちは、1945年の暮、ユーモアのある明るい番組を構想しながら、歌手の新人募集という案を考え出した。

これに関連してヒントを得たのは、人が大勢集まったり、一杯ひっかけた時には、必ず日ごろのど自慢が現れるということ。こういう人たちが楽しく歌う放送はきっと聴取者にも共感を与えるだろう。こんな予測のもとに素人のど自慢を企画したわけです。聴く人、歌う人両方がなごやかに楽しめることにねらいがありました。昭和二十一年一月十九日と日を決めると、さっそくラジオを通じ全国に呼びかけた。十二、三日ごろから数回にわたって放送を続けたと記憶していますが……。

歌謡曲、クラシック、民謡、なんでものど自慢に自信のある者は、ふるって来れ、という内容の呼びかけ。<sup>18</sup>

しかし、最初、丸山氏たちは、はたして呼びかけに応じてもらえるだろうか、と心配した。何しろ、終戦直後のことで、食糧事情も悪く、歌どころじゃないだろう、というのが皆の考えだった。ところが、フタをあけてみて驚いた。

一月十九日午後一時からというのに、午前十一時には、内玄関から文部省近くまで長ダの列。係の者は、応募者の整理にテンテコ舞いの騒ぎでした。

つめかけた人たちの数を調べるため、番号札をくばったが、その数、なんと九百、七、八十。復員服に戦闘帽をかぶった男や、買い物カゴをぶらさげたモンペ姿の女、ゲタばきの街のアンチャンなど、まるで食糧配給を待つ行列さながらでした。<sup>19</sup>

この列の中には、何か配給されるのじゃないかと思って並んだ者もいたというが、それは、ともかくとして――

---

<sup>18</sup> 前掲書、31頁。

<sup>19</sup> 前掲書。

植田 康夫（代表）

・・・その日は、三百名だけを残し、あとの人は次回にしてもらい、一時から六時までかかって、やっと三十五名を選びました。

つづいて六時半から、合格者の歌声を電波に乗せ、第一回「のど自慢素人音楽会」が誕生したのです。

この時、多くの応募者が歌ったのが“赤城の子守唄”“愛染かつら”など懐かしのメロディー風の歌ばかり、それに流行しはじめた“リングの歌”などでした。<sup>20</sup>

こうした経緯で「のど自慢」は始まったのであるが、この番組よりも早く聴取者参加の番組として始まった「希望音楽会」は、1945年10月から48年12月までラジオの第1放送で毎週1回30分放送された。この番組では、聴取者から投票で希望する曲と出演者を選んでもらい、開始当初は1日5000通の投書が寄せられ、番組では「今夜は○○さんのご希望です」と紹介し、投書を読んだりした。初期にはクラシック音楽と歌謡曲などの軽音楽を交互に放送したが、48年4月からは、軽音楽だけになった。<sup>21</sup>

NHKは、このように敗戦直後から、「のど自慢」だけでなく、聴取者参加の音楽番組を放送したのだが、「のど自慢」に参加する人々の様子については、「アサヒグラフ」の1946年3月25日号が報じている。

日比谷の放送会館が、時ならぬ時に大群衆に取り囲まれるのが近頃の異風景。見ればギターを抱える青年やら心配気に楽譜を覗き込む娘さんすら混じっているというのだから、決して流行の放送局従業員組合のデモではない。

これぞ最近ラジオで好評の「喉自慢素人音楽会」、別して「心臓自慢素人音楽会」のテストに、全国から喉を撫して馳せ参じた老若男女の一群である。去ぬる日のテストの応募者は男女相半ばして七百人余。その内の一割が合格と云うから相当の狭き門と云うわけ。それも審査員はヤレ秋田から三日がかりで今着きましたとか、手の混だ草笛入の尺八持参だとか、曲目が素人離れしているとか云うのが現れると

---

<sup>20</sup> 前掲書。

<sup>21</sup> 日本放送協会『20世紀放送史・上』、240頁。

ツイふらふら合格させる気になって終うとか——。職業はマチマチで、会社員に女事務員はザラ、大工さん、転工さんから果ては七十二歳の金箔師まで飛び出す騒ぎ。審査員に専門の音楽家を持ってきては、点が辛過ぎるとの投書を尊重して素人の放送局音楽部員が当落を決定するが、合格の基準は何となく気分が出てさえすればOK、曲目では「リンゴの歌」が大氾濫。これに次ぐのが「愛染かつら」でこの二曲に伴奏者も審査員もウンザリ。マトモな曲では「帰れソレントへ」重音楽組の応募者の中には伴奏者同伴で堂々と出現するものもある。こちらのクラスともなれば流石に相当の年期を入れているらしくまづ合格。一方伴奏付だと全然歌えなくなる者も多いのだから、隅にある水差しが、何べんかお代わりにするのも宣なるかな。<sup>22</sup>

第1回の「のど自慢」で合格となり、一躍、スター並の人気を得たのは“床屋の英ちゃん”こと下門英二氏である。下門氏は1946年当時、理髪店で働いていたが、第1回の放送に出演して合格第1号となったが、その時のことを、こう語っている。

第一回のど自慢があったのは忘れもしない、終戦のあくる年の一月十九日。当時の東京はまだ空襲の焼け跡だらけ。娯楽といやあ、NHKのラジオ放送ぐらいなもの。アタシは床屋をやってたから、仕事をしながら一日中聞いてた。で、そこで第一回ののど自慢の参加者を募集しているのを知り、以前に歌を習ってたこともあって、いっちょ自分もと応募したわけ。場所は内幸町にあったNHKのスタジオ。三百人ほど集まったのかな。なのにアタシの前、二十人か三十人歌っても、一人も合格者が出ない。ヨシ、オレが第一号だと張り切って藤山一郎さんの“青春日記”を歌ったところ、これが見事合格したんだ。いや、キンコンカンの合格の鐘はまだ使ってなくて、係の人が指で丸を作って教えてくれてね。<sup>23</sup>

<sup>22</sup> 「押しかけたノド自慢」『アサヒグラフ』1946年3月25日号、朝日新聞社、12頁。

<sup>23</sup> 「あの人は今こうしてる」『日刊ゲンダイ』1984年2月8日、日刊現代、17頁。

植田 康夫（代表）

この合格によって、下門氏はNHKの地方局が開局するたびにゲストとして呼ばれるようになり、ちょっとしたスターになった。

「のど自慢」は、初代の司会者は高橋圭三アナウンサーであったが、彼は初期の「のど自慢」に出演した人たちについて、放送作家の早坂暁氏との対談で、次のように語っている。

早坂 「のど自慢」は最初はどこで？

高橋 NHKの新橋の第一スタジオです。

早坂 出る人も緊張していたんでしょうね。

高橋 もう大変。歌が終わって僕が話しかけても、返事をしないんです。そのつもりで来てないから。

早坂 なかなかしゃべらないものですか。

高橋 ええ。マイクロホンが怖いんですよ。それまでのラジオは玉音放送だとか軍の放送でしょう。それに実際に立ってみたらピストルみたいに見えるんですね（笑）。だから僕が聞くと構えちゃって答えてくれない。しかたないから僕が一人でしゃべるんです。いかにしゃべっていただくかということに腐心しました。今のアナウンサーはいかにマイクを取り返すかということに苦労していますけど（笑）。僕から見たら日本人は人種が変わったんじゃないかと思うくらい（笑）。<sup>24</sup>

この対談は、NHKのマイクに対して敗戦直後の国民がどのような感性を持っていたかを伝え、さらに日本人が人の前で話すことが苦手であったのに、今はすっかり変わってしまったことも示唆している。

「のど自慢」における表現の変化は、日本人の変化でもあるのだが、この番組は1948年8月1日の放送で、後に大流行する「異国の丘」という歌を初めて電波に乗せた。この歌は日本の敗戦後、ソ連に強制連行された兵隊たちの苦労を歌ったもので、1人の服役軍人が、今日も暮れ行く異国の丘に・・・と歌い、見事に合格したのだが、その時、たまたま放送を聞いていた作詞家の佐伯孝夫氏が、翌日、ビクターへ行って、この歌のことを話した。すると、ビクターでも同じように印象にとめた人がおり、すぐにディレクターが

---

<sup>24</sup> 「早坂暁のテレビがやって来た！」『放送文化』1999年10月号、日本放送出版協会、40頁。

NHKにかけつけてレコード化の許可をとり、放送で歌った中村耕造氏と、当時売り出し中の歌手だった竹山逸郎氏を加えて秋口にレコード化し、大ヒットとなった。最初、この歌は作者がわからず、NHKがビクターと別に独唱、合唱、管弦楽で引き揚げ促進キャンペーンをかねて連日のように放送し、「作者は申し出て下さい」と呼びかけ、数十人が名のり出た。しかし、該当者はなく、そのころ、吉田正という元陸軍伍長がソ連から復員し、故郷の茨城県日立市でラジオから流れ出るその歌を聞いた。それは吉田氏が戦時中、「大興安嶺突破演習の歌」として作ったもので、それに増田幸治氏がウラジオストック郊外、アルチョム収容所で「俘虜の歌える」という歌詞を作り、副題として「異国の丘」とつけたものだった。吉田氏は、自分が作曲した歌であるのにもかかわらず、名のり出る気分にはなれず、友人の米山正夫氏に促され、やっとNHKに出かけ、これを契機に、ビクターに迎えられ、佐伯孝夫氏とのコンビで、数々のヒット曲を生み出すことになる。<sup>25</sup>

「のど自慢」の初期には、こんなドラマもあったのだが、実は「異国の丘」が初めて放送される前年の1947年12月、この番組の放送の中止が決定されたことがある。その理由となったのは、回を重ねるにつれて、出場者の顔ぶれが決まってきたことと、出場者が自分の歌が下手なのを伴奏者のせいにして、会場のふんいきを乱す者がいたことなどである。<sup>26</sup>そして、「だれにも簡単に歌ってもらえる民主的企画はよいが、これをあまり人気化すると、歌謡界を乱すことになりかねない」<sup>27</sup>という意見も出た。つまり、「のど自慢合格を職業歌手への踏み台にする者が出てきた」<sup>28</sup>ので、「明朗な健全娯楽は失われるのではないか」<sup>29</sup>という批判が出てきたのである。

これに対し、この番組を企画した人たちは、「“のど自慢”は、人の心に歌を通じて明るい窓を与える番組ではないか」<sup>30</sup>と、抵抗したが、反対側の意見が強くなるばかりで、中止ということになった。そこで、最後の打上げということで企画されたのが、「のど自慢全国コンクール」であった。これは、全国61の放送局を総動員し、各府県予選、地方大会と篩にかけて選ばれた

<sup>25</sup> 矢沢寛『流行歌気まぐれ50年史』1994年、大月書店、29-31頁。

<sup>26</sup> 『週刊東京』1957年3月9日号、31頁。

<sup>27</sup> 前掲書。

<sup>28</sup> 前掲書。

<sup>29</sup> 前掲書。

<sup>30</sup> 前掲書。

植田 康夫（代表）

26名がのどを競うというもので、予選に集まった応募者総数は3万人を越えた。このコンクールは、1948年3月21日午後2時から5時まで行われ、晴れの日本一として3名が選ばれた。この日は、鐘も鳴らず、出場者は歌を最後まで存分に歌え、コンクールは好評を博し、「のど自慢」は継続となり、全国コンクールも毎年行われるようになった。<sup>31</sup>

1度は中止が決定された「のど自慢」は、第1回「のど自慢全国コンクール」が好評だったため、続行されることになったが、全国コンクールの当日は1500人分の入場券が50円で売られた。しかし、これを200円で売るダフ屋が出るほどの人気で、出場者は周囲の人から元気をつけろということで、生卵を持たされたため、トイレが生卵のカラだらけになったという。ちなみに、第1回の優勝者は歌謡曲部門が羽島百合子さん、歌曲部門が岩本忠氏、民謡部門（当初は俗曲部門）が和田ツネさんであったが、以後、全国大会はこの3部門で競われる。第1回の優勝商品は五級スーパーラジオとカップであった。この時の優勝者である和田さんは、横浜の大工の奥さんであったが、その後離婚し、消息がわからなくなった。しかし、他の人々は、その後の優勝者と一緒になって「のど自慢日本一の会」を作り、毎年、3月21日に自慢ののどを披露し、思い出話にふけるようになった。<sup>32</sup>

このような経緯で続行が決まった「のど自慢」は、2度にわたって名前が変わっている。最初は、「のど自慢素人音楽会」であったが、1947年6月から70年3月まで「のど自慢素人演芸会」となり、70年4月以降は「NHKのど自慢」となった。全国コンクールは、その後なくなり、今は毎回の「のど自慢」の合格者からチャンピオンを選び、その人たちが競うチャンピオン大会が3月に行われ、グランドチャンピオンが選ばれる。

「のど自慢」は前にもふれたように、初代の司会者は高橋圭三氏であったが、長期にわたる司会者としては、宮田輝、金子辰雄、宮川泰夫氏らが有名で、歌手の北島三郎氏は、「のど自慢」に出場して宮田氏の言葉で歌手になることを決意したという。北海道の函館西高等学校に通っていた1953年、函館にやって来たこの番組に出場した時のことである。

同級生が応募しちゃって、それで出させてもらった。歌ったのは、

<sup>31</sup> 前掲書、30頁。

<sup>32</sup> 『週刊新潮』1984年1月5日号、50-56頁。



当時の大ヒット曲、三浦洸一さんの「落葉しぐれ」でした。

鐘は二つしかもらえなかったんです。でも、このとき司会の宮田輝さんに言われた言葉が、その後の人生を決めてしまいましたね。「はい、学生さんですか？ はい。お上手でしたよね。はい。いい声していました。はい」(笑)

お世辞でしょうけど、ほめてくれた。「ひょっとしたら、おれ、これで飯食っていけるんじゃないか」と思っちゃったわけですよ。<sup>33</sup>

これがきっかけとなり、北島氏は高校卒業前に東京へ出て東京声専音楽学校を受験し、合格したが、その学校がクラシック専門だったために入らず、「歌手募集」という広告につられて演歌師となった。そのことが、後の歌手という職業につながった。「のど自慢」の司会者として親しまれた宮田輝氏の言葉が、北島氏の人生を決定したのである。

宮田氏と同じく、司会者としてこの番組を長く担当したのは、金子辰雄氏もそうだが、彼は36年間のNHKの生活の中で16年7カ月、「のど自慢」の司会を担当し、1987年に定年でこの司会を最後に退職した。1970年8月が第1回であったというが、司会者として心がけたことは2つあるという。

その一つは、私自身を司会者だと思わないということです。それでは何をしているのかということになりますが、私は歌のおてつだいさんだと思っています。出場者の皆さんは緊張のあまり、いつもはちゃんと覚えているはずの歌詞を忘れてしまうのです。その時、私がそばで一節、歌ってあげますとふっと思い出す場面が多いのです。ですから家にいます時は歌の勉強です。と申しましても歌うわけではなく歌詞を覚えるのです。演歌の場合、一番の歌詞だけでいいかなと思っていますと、中には、私は三番の歌詞が好きですとおっしゃる方もいますので、一番二番三番と全部覚えなくてはなりません。<sup>34</sup>

さらに、金子氏が司会者として心がけていたことがある。

<sup>33</sup> 「のど自慢の仲間たち」『ラジオ深夜便』2005年12月号、日本放送出版協会、33-34頁。

<sup>34</sup> 「サヨナラ素人のど自慢」『文藝春秋』1987年4月号、文藝春秋、318頁。

植田 康夫（代表）

もう一つは、一度お会いした人の名前とお顔は絶対に忘れてはいけないということです。のど自慢は土曜日の午後、本番出場二十五組（注・現在は20組）を決めるための予選が行われます。予選には大体三百五十人から四百人（現在は250組）がおいでになります。私達には、あらかじめ予選出場者の名簿が手渡されますが、私はそれをみていつも思うのです。「この方達がのど自慢を支えて下さっているんだな」と。

言葉を代えて申しますと、のど自慢のお得意様の名簿なのです。お得意様のお名前を忘れてしまったら、のど自慢だけでなく、どんな仕事もうまくゆくはずがありません。<sup>35</sup>

しかし、1度に400人全員の名前を覚えるわけにはゆかないので、金子氏は各都道府県別のノートを作り、予選の名簿を自宅に持ち帰り、名前、歌った曲、特徴をノートに書き移し、次にその県に出かける時にあらかじめ見ておいて、予選会場でお目にかかった時、あらかじめこちらから「昨年はお世話になりました」と、挨拶するようにしたという。これは、金子氏が、「のど自慢」に対して、次のような想いを抱いていたからである。

のど自慢は歌を通じて人と人とがふれあう番組です。放送が終わった時点が、お付き合いの始まりです。一年に各地で予選に出場して下さる皆さんは、約二万人です。私は十六年七カ月の間におよそ三十五万人の出場者の皆さんにお目にかかりましたが、今でも沢山の皆さんとお付き合いが続いています。本番に出場して下さる二十五組の皆さんが、「これでお別れするのは淋しいですねえ。今日をこの会の記念日にして毎年集まりませんか」と、二十五組の中の一人が幹事役になって、“二十五人の会”という同窓会が各地に出来ています。<sup>36</sup>

これは、今も続いているが、出場者の“同窓会”が出来る番組は「のど自慢」くらいのものであろう。この番組出場が契機となって出場者同士が結婚

---

<sup>35</sup> 前掲書。

<sup>36</sup> 前掲書、319頁。

することもあり、日曜日の挙式の場合は金子氏は招待されても出席できないので、祝電だけを打つようにしているが、中には仲人の役をつとめたことのあるカップルもいる。

またある時は、よく「のど自慢」に出場していた男性の娘さんが亡くなり、いつも父親を予選会場で応援していた娘さんの写真を託され、金子氏はその写真と共に「のど自慢」の旅を続けたというが、金子氏は、この番組のモットーについて、こう書いている。

私はのど自慢は、名前こそNHKのど自慢ですが、気持としては全国の歌の仲間の同窓会、各市町村支部の総会をやっているんだと思っています。“明るく楽しく元気よく笑顔は心のビタミンC”、私が予選出場の皆さんにいつも申し上げることばです。音楽は音を楽しむと書きます。皆さんが自分自身の音を充分に楽しんで下さっているのをステージで聞きますと、“ああよかった”と心のそこから思うのです。<sup>37</sup>

この「明るく楽しく元気よく」は、「のど自慢」のコンセプトでもあった。そのことを、次のレポートが伝えている。

番組のコンセプトはスタート当初から変わらない。「単なる視聴者参加型の歌番組ではなくトークを加えた人間ショー、人間ドキュメント番組」「明るく楽しく元気よく」である。番組制作局芸能番組センター（歌謡・演芸番組）の荘加満チーフ・プロデューサーがこう語る。

「出演者だけではなく、視聴者にも楽しく日曜の昼を過ごしていただけよう努めています。歌はあまり上手じゃないけどパフォーマンスが面白い、衣装にキャラクターがにじみ出ている、家族とのエピソードからその人の人情味が浮き彫りになることが大切なんです。

視聴者も、『この人はカネ2つかな』『うちのおばあちゃんのほうが上手なんじゃない』『ユニークな人だね』などと言いながら楽しめる番組にしています<sup>38</sup>

<sup>37</sup> 前掲書、322頁。

<sup>38</sup> 小田桐誠『「明るく楽しく元気よく」歌とトークの人間ショー』『新・調査情報』2004年5-6月号、東京放送編成局、18頁。

植田 康夫（代表）

ハガキでの申し込みが毎週1000～1500人にのぼり、土曜日の予選会には250組が無作為に選ばれ、午後1時から6時30分まで、1組あたり40秒ぐらゐずつ歌い、本番出場者が決まる。本番は次のように行われる。

番組の冒頭、その町の歴史・風土や特産品を紹介するビデオコーナーがある。時に旅行好きの視聴者の心をくすぐる1分間だ。後は20組の熱唱、絶唱、独唱と、涙あり笑いありのトーク。カネ2つでズッコケる出場者がいれば、カネの連打にうれしさのあまり宮川アナ（注・前司会者）に飛びつく人もいる。もちろん感動して泣き出す出場者も。<sup>39</sup>

この番組では出場者たちの連帯感も強く、合格者をハイタッチや拍手で迎えたりするが、現在のスタイルが確立したのは、1968年に番組改革が行われた時で、「歌とトークの人間ショー、人間ドキュメント」という路線が確立、ハンドマイクの採用でアクションが多彩になり、服装も個性的となり、舞台上に椅子を置いて出場者全員の姿や表情が見えるようにしたという。<sup>40</sup>

また、海外での開催も1960年以後、随時行われているが、このように進化する「のだ自慢」を、女優の岸ユキさんは、東京新聞2005年12月6日付の「言いたい放題」というコラムで、「あっぱれNHKのだ自慢」<sup>41</sup>と評価した。

〔植田康夫〕

## 2 「のだ自慢」制作現場の参与観察

2006年で60年目を迎えた「のだ自慢」も、開始当時は出場者にとってマイクの前で唄うという行為はもちろんのこと、一般の人がテレビにでること自体、稀有であり、非日常的な出来事、つまりハレの舞台であった。この60年間、電気通信技術の進歩とともに、テレビは白黒からカラーへ、そして放送エリアも、地上波放送に加え、衛星放送やCATVによって、国内のみならず、海外へと拡大した。数え切れないほどの番組の視聴が可能となり、国内の番組だけでなく、海外からの番組も多く放送されるようになった。60年前とは比較にならないほど、日本人の日常生活にメディアが深く入り込み、影響を

<sup>39</sup> 前掲書、19頁。

<sup>40</sup> 前掲書、20-21頁。

<sup>41</sup> 岸ユキ「言いたい放題」『東京新聞』2005年12月6日、14頁。

与えてきた。放送・通信技術の進歩により、「のど自慢」も衛星を介して海外でも視聴できるようになった。また、北南米やアジア、ヨーロッパなどで開催した「のど自慢」海外大会を日本で放送することも可能となった。近年では、インターネットの出現が、さらに私たちのメディア環境を大きく変えてきている。ネット上では、「のど自慢」のファンサイト（例えば、「LOVE LOVEのど自慢」<sup>42)</sup>）がいくつも開設され、出場者やファンたちがのど自慢出場経験などの情報交換をしている。

当然、この60年間の「のど自慢」放送にも変化が見られる。細かい構成や演出といった番組の内容に関する変化もさることながら、出場する人たちの変わりようは顕著である。例えば、以前はマイクの前で緊張し、直立不動で唄っていた出場者が多かったが、テレビの普及とともに、テレビに慣れ親しみ、またカラオケ文化の発展から、人前でも緊張することなく、楽しみながら堂々と、時には派手な振りをつけて唄う人たちが多くなった。いわゆるテレビ慣れ世代であり、年齢層が若くなるにつれてこの傾向は顕著である。「のど自慢」をプロ歌手への登竜門として挑戦する人もいる一方で、最近では歌のうまさを競う者同士というより、同窓会の仲間のように仲良く応援し合う出場者たちの様子が目に付く。高齢化社会に伴い、年配の出場者が多くみられるようになり、また、体が不自由な人々や在日の外国人など、これまではあまり出場していなかった人々も応募し、マイクの前で唄うようになってきた。このように「のど自慢」の細部で変化がみられるものの、基本的なスタイルはほとんど変わっていない。変わらないのは、一般の応募者から選ばれた人々が、舞台の上で、客席、そしてカメラの向こう側の人たちにむかって、鐘が鳴るまでマイクの前で唄う、というスタイルである。この単純な構成の番組が、放送開始から半世紀以上たった今も、常時10パーセント以上の視聴率を稼ぎ、グランプリ大会や海外大会では20パーセント前後の高視聴率をあげている。視聴率の高さというより、基本的に変わらないスタイルの番組が長期間に渡って受け入れられてきたこと自体、放送文化史上でも稀有なことと言える。

「のど自慢」は、なぜこれほど長きにわたり、日本人に見続けられてきた

---

<sup>42)</sup> 2000年3月に一人ののど自慢ファンによって開設された「のど自慢」ファンのためのウェブサイト (<http://www004.upp.so-net.ne.jp/nodojiman/>)。のど自慢関連のウェブサイトで最も人気が高く、2006年2月に60万アクセスを記録している。

植田 康夫（代表）

のか。この番組の何が多くのの人々を魅了し続けているのか。17年間、「のど自慢」の司会を担当していた金子辰雄（元NHKアナウンサー）は、著書『ふれあい2000万人の「のど自慢」』（1988）で、その舞台裏を含めて、のど自慢の出場者や関係者たちとの交流を描いている。<sup>43</sup>これは司会という立場から長期にわたって観察した、いわば自己参与観察記録とも言うべきもので、示唆に富んだ貴重な資料である。その中で、金子は「のど自慢」に参加する人々について、出会い（応募動機）、ふれあい（参加者や仲間）、そしてかかわりあい（つきあい、コミュニティ）が重要であると強調している。応募動機は人によって異なるが、それぞれ想いがあり、時にその想いが人々を感動させる。また、予選や本選に参加した人同士が、互いに触れあう機会にもなっている。小さな町では、互いの顔をよく知っていることも多く、それだけに、密度の濃い付き合いになる。一方、大きな市や町の場合では、一期一会的な出会いが待っていることも多い。このように「のど自慢」を通じて知り合った人々が、番組終了後も出場者同士の同窓会などを通して関わり合いを継続しているケースが多い。「のど自慢」の番組制作現場では、人と人とが出会い、触れ合う関係を大切にすることが、金子の観察から理解される。これは、画面を通して視聴者にも伝わっていると考えられる。

「のど自慢」において、司会は非常に重要な役割を果たす。これは、高橋圭三、宮田輝、金子辰雄、宮川泰夫といった歴代の司会者が番組の看板となったことから容易に想像できる。金子辰雄は「のど自慢」の人気司会者であり、また多くの視聴者に見てもらおうと努力し続ける番組制作者の一人でもある。当然、参加者と触れあう機会が最も多く、さまざまなエピソードにも遭遇する。このような立場からの観察は、一参加者として番組制作現場を観察するケースとはかなり異なる可能性がある。金子が言うように、「人間らしい出会い、触れ合い、そしてかかわりあい」が、「のど自慢」という番組にとって重要なものであるならば、それは、なぜその番組制作の場で起こっているのかを深く考えてみる必要がある。ここでは、金子が指摘した「人間らしい出会い、触れ合い、そしてかかわりあい」が、「のど自慢」という、メディアによってイベント化された空間としてのハレ舞台の裏側でどのように起きているのかについて観察を行ない、この番組がなぜ長い間日本人に受

---

<sup>43</sup> 金子辰雄、『ふれあい2000万人の「のど自慢」』1998年、講談社

け入れられてきたのかについて考察する。

## 2-1 参与観察

本研究では、「のど自慢」の予選および本選大会へ観覧者として参加し、参与観察を実施した。予選は誰でも観覧ができるが、本選大会への参加にあたっては、葉書で観覧希望の大会に応募する必要がある。通常、開催地の公民館や市民会館などで行なわれ、千名前後の観覧者募集に対して、数倍から十倍近くもの応募がある（写真2-1は落選葉書。この時は七千名以上の応募者があった）。

この観覧応募者数からもこの番組の人気の高さが伺われる。同時に、私たちも何度か応募して落選した結果、一般応募で観覧できる可能性は極めて少ないことが分かった。最終的にはこの番組を制作しているNHKの芸能番組センターの協力を得て、以下の3つの地域で開催された予選と本選大会を観察することとした。本選が満員なのは当然としても、例えば、北海道恵庭市の会場では予選の時から立ち見がでるほどの盛況ぶりであった。

写真2-1：「NHKのど自慢」  
観覧申し込み  
(おわび状)



植田 康夫（代表）

- ①2005年2月12－13日 神奈川県厚木市（市民会館）市制50周年
- ②2005年2月26－27日 北海道恵庭市（市民会館）市民会館リニューアル記念
- ③2005年3月26－27日 愛知県万博（愛 地球博）万博イベント

最近では、「のど自慢」を地方自治体の祝賀イベントとして招聘するケースが多い。本研究で観察した3つの大会も全て記念イベントとして開催されていた。特に、愛知万博で開催された大会に関しては、通常よりも30分ほど長い放送となった。

基本的には生番組であるが、年に何回かは録画分を放送する。今回の参与観察では、厚木市で開催された大会が録画となった。2005年4月から、司会担当が宮川泰夫アナウンサーから宮本隆二アナウンサーへ交代することになり、宮本アナウンサーが初めて司会をする4月の第一回目放送分として、この厚木大会が選ばれた。主役が一般市民である歌番組を、生で時間内に間違いなく終わらせるということは非常にむずかしく、臨機応変な対応が出来るくらいの十分な経験が必要とされる。

基本的には国内のどこで開催されても、予選・本選の構成はほぼ変わらない。下記は、予選と本選のおおまかなスケジュール表であるが、表を見ると分かるように、出場者は放送される時間以外に長時間に渡って拘束されることに同意しなければならない。まず予選大会では、事前に抽選で選ばれた予選出場者らが、午前10時頃から入り口に並び始める。受付が12時から開始され、予選会は午後1時から大体5時半頃までかかる。審査結果は6時すぎに発表されるが、審査発表時に唄った本人が会場にいることが原則であるため、6時半頃まで会場にいることになる。本選大会への出場が決まった出場者は、この後、アナウンサーやスタッフとの打合せ、そして歌のキー合わせなどを行い、夜10時過ぎまで本選の準備をすることになる。従って、本選出場者は予選と本選を通して18時間近くを制作現場で過ごすことになる。



表2-1 「NHKのど自慢」の進行スケジュール

|          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 予選スケジュール |                               |
| 9:00～    | セッティング・アナ地元取材                 |
| 12:00～   | 予選受付・昼食                       |
| 12:50～   | 予選会前説                         |
| 13:00～   | 予選会（途中休憩2回くらい有り）              |
| 17:30～   | 審査                            |
| 18:10～   | 結果発表                          |
| 18:30～   | 出場者面接・キー合わせ                   |
| 22:00    | 解散                            |
| 本選スケジュール |                               |
| 7:50～    | 出場者集合・説明会                     |
| 9:00～    | 出場者音合わせ                       |
| 10:00～   | ゲスト音合わせ                       |
| 10:20～   | カメラリハ                         |
| 11:00～   | 客入れ・昼食・                       |
| 11:45～   | 前説・挨拶                         |
| 12:15～   | 本番                            |
| 13:00～   | チャンピオン再歌唱・アトラクション<br>(ゲスト各2曲) |
| 14:00    | 出場者解散                         |

本選出場者は翌朝7時過ぎに集まり、細かい説明、音合わせ、カメラリハーサルなどを行なっていく。当日のゲスト（2組の歌手）と顔合わせするのもこの時で、ゲストの音合わせやカメラリハーサルも近くで見ることができ、ゲストとおしゃべりできる幸運な出場者もいる。本番30分前には司会のアナウンサーから前説があり、また、「のど自慢」を開催するご当地の放送局長などNHKの経営上層部が必ず挨拶を行なう。本番は放送と同じく12時15分から始まり13時に終わる。放送はここで終わるが、実際はこの後にアトラクションが待っている。通常、チャンピオンはグランドチャンピオン大会用の

植田 康夫（代表）

録画もかね、再度、唄うことができる。そして、当日のゲスト2組が自分の持ち歌を2曲ずつ歌い、参加者と会場の観覧客を楽しませて、イベントのすべてを終える。本選出場者たちは、このあとNHK関係者から二日間にわたる協力に対する感謝が述べられ、それが終わってから解散となるが、本番当日も、合計で6時間ほどを会場で過ごす。このように予選と本選の二日間でかなり密度の濃い「のど自慢」の時間を共有することになる。

「のど自慢」を構成する主なメンバーは、以下にあげたとおりである。スタッフや関係者を除いた構成メンバーはほぼ全員画面に登場する。観覧者に関しては、出場者の家族、知人や友人といった応援者らを、カメラリハーサルするときから事前にチェックし、番組内で写すことが多い。また、本選の前説の中で、NHK側からは「のど自慢らしい笑顔」を観客にお願いしているが、本番では、カメラが会場で笑顔がさわやかな観客を選び、放送中に、インサートショットとして画面に映し出すのである。

- 司会（アナウンサー）
- 出場者（22組）
- ゲスト（2組）
- バンド・鐘奏者
- 観覧者（出場者の家族、知人・友人、応援者を含む）
- NHKスタッフ（プロデューサー、フロアディレクターら）
- 地元関係者（自治体職員など）

本研究では、参与観察に加えて、NHKの許可を得て、司会の宮川泰夫アナウンサー、予選および本選出場者、そして、一般観覧者らに詳細インタビューを行った。前述したように、本研究は「人間らしい出会い、触れ合い、そしてかわりあい」が、「のど自慢」という番組にとって重要なものであるという前提で、それが舞台の裏側でどのように起きているのかについて考察を行ない、この番組がなぜ長期間にわたって日本社会に受け入れられてきたのかについて、その理由を探求しようとするものである。参与観察と詳細インタビューの分析結果から、最終的に、この研究課題に関して、主に三つのテーマー(1)全員参加の仕掛け、(2)見えない部分の演出、(3)地域の元気という合言葉ーが浮かび上がった。以下、それぞれについて報告する。

### ①全員参加の仕掛け

「のど自慢」は、日本の放送番組の中でも、歴史のある視聴者参加型番組である。放送では、出場者として、あるいは観覧者として参加している部分だけが写されるが、実際には、出場者や観覧者も、スタッフ同様に主要な番組構成メンバーであり、予選の段階から番組制作の過程に深く関与していく。最終的には、出場者や観覧者も場当たりの参加ではなく、全員で番組制作に関わっていく。つまり、「のど自慢」の空間に関わる人々は、自分もこの番組制作に参加しているメンバーの一員であることを自然に意識するようになっていくようである。

この「全員で作っている」あるいは「自分も参加している」という感覚は、予選の段階から、さまざまな過程を通して急速に醸成される。特に、予選でのムード作り、そして主要な構成メンバー間のコミュニケーションや関係作りが鍵といえよう。予選では応募で当選した250組が集まり、各組は本番同様、舞台上でワンコーラス程度を歌う。出場者の家族や応援者も観覧に来ており、どの会場でも本番以上の熱気に溢れていた。

予選会の冒頭で、NHKのフロアディレクターが予選の進め方などについて説明を行なうが、実はこのディレクターの説明が予選のムード作りを大きく左右する。比較的若く、カジュアルな服装をしたディレクターは、柔らかな口調で会場の人々に語りかけ、会場との掛け合いを行ないながら進めていく。時には、若いスタッフたちの個人的なエピソードを紹介し、親近感を感じさせるような演出もある。「後で盛り上げると思わずに最初から盛り上げてください！」という言葉で、会場はさらに熱気を増し、会場にいる人たちはリラックスしながらも、「のど自慢」というイベントに集中できる状態になっていく。そのような状態になったところで、司会（アナウンサー）が登場し、会場は大拍手となる。司会は、丁寧だがリラックスした口調で、冗談やジョークを巧みに使いながら、「明るく楽しく元気よく！」と強調する。会場との掛け合いを交えながら、「明るく楽しく元気なのど自慢」の雰囲気を一気に作りあげていく。観察者の私たちでさえ、観察を忘れ、思わずこのムードに引き込まれてしまった。経験豊かな宮川アナウンサーは、歯切れの良い口調で「お茶の間の皆さんに自分の歌を届けてください。歌に込めたメッセージ、自分のキャラ、歌が好きという思いを伝えてください」と出場者にむかって呼びかける。そして、「予選会場を盛り上げてください。一つ拍手、

植田 康夫（代表）

二つ手拍子、そして、三つ声の応援をお願いします」と会場全員にゼスチャー交じりで訴える。当時、度重なる不祥事に端を発したNHK問題が世間を騒がしていたが、これさえも、ムード作りに一役買ったともいえる。例えば、宮本隆二アナウンサーは「最近のNHK厳しいです。皆様からお叱り受けてます。今日は来てくれないかと思いました」と辛そうな顔をして頭を深々下げると、逆に会場からは拍手が沸き起こる。このように、アナウンサーの話が終わる頃、つまり予選がいよいよ始まるときには、会場全体は何とも言えない一体感に包まれてしまうのである。

## 写真 2-2 「NHKのど自慢」予選会場に長い列

2005年2月26-27日 北海道恵庭市（市民会館）



また、「のど自慢」では、250組の人たちをどのように扱うかということ、大変重要視している。宮川アナウンサーは、どのような想いで予選の人たちと向き合ってきたかを、以下のように語っている。

「のど自慢」の顔をしてはいけません。生身の人間として20組と向き合えるかどうかです。カラオケ大会ではありませんから…毎週登場する20組が作ってきた番組です。予選までは台本がない。予選の250組を必死になって聞かせてもらう。これが全てです。

20組を選ぶというよりも、「250組を聞かせてもらう」という姿勢はいたるところで感じられる。例えば、予選では鐘の代わりに「有難うございました」というアナウンスが流れる。これは、本番の審査の鐘ではなく、来て唄ってくれた人たちへの感謝の意味も含むと考えられるだろう。唄う方も真剣だが、聴く方も真剣である。それはスタッフだけでなく、会場で聞いている人たちも同様にみえる。私たちも、初めて予選を観察した際、250組全部聞くというのはかなり労力を必要とし、また多少なりとも飽きてしまうのではないかと危惧したが、実際には、それぞれ趣向を凝らした衣装や振りや次々と違う歌を聴くのは、飽きなかった。むしろ、どの組が合格するか予想したり、思わず手拍子したり、笑ったりと、参与観察者全員が「のど自慢」の世界にひきこまれてしまった。会場に来ている人の中には、知人や家族の出場の応援のため、「のど自慢」が好きだから、さらに近いから来たなど、さまざまな理由があるが、会場でインタビューした人々は口を揃えて「すごく楽しい」と言っていた。例えば、別々に応募して歌った母娘は、「予選の方が楽しい。いろいろな歌がきける。先に帰ろうと思ったけど、面白いからずっといた」と話していた。予選のときから、出場者と会場との間に距離を感じさせないムードがつくられている。

このように、長時間の予選大会は終始盛り上がった状態のまま、合格発表へと続く。このようなムードの中で合格した出場者らの喜びや興奮はすごいものである。合格発表の直後、スタッフが合格した一組一組に対して面接を行い、当人の話や歌の裏話など個人的なエピソードを聞いていく。興奮冷めやまぬムードの中で、紅潮した合格者たちはスタッフの質問に饒舌に答えていく。合格者の話は、翌日の本選で歌手の情報として紹介されることになる。出場者が唄う前に、司会が簡単なプロフィールを紹介する構成になってから、視聴者がより思いをもって見られるようになったと宮川アナウンサーが話していた。その人なりの面白いエピソードや本音を、いかに聞きだすかは番組にとって大変重要である。また、スタッフやアナウンサーが丁寧に自分の話を聞いてくれるという行為は、出場者にとっても、自分が大切に扱われているという印象を持たせる。制作現場では、スタッフや司会は出場者と気軽に話をしている。出場者の一人は、「さすがNHK。45分の番組でここまでやるとは。出場者を主体にして、すごく大切にしてくれる。スタッフは皆頭の低い人たちで真面目。(NHK不祥事については) 本当に一部の人たちのせ

植田 康夫（代表）

いでこんなこと言われてかわいそう。受信料は払う」と話していた。他の出場者からも同様な意見が結構聞かれた。このように、スタッフがさまざまな局面や過程において、出場者との触れ合いを大事することから、出場者もそれに応え、結果としていいコミュニケーションが持たれ、そこに一体感が生まれていく様子が分かるであろう。

合格が発表された直後から、あたかも偶然、同じ船に乗りあわせた者同士のような、合格者間のコミュニケーションが始まる。このような特殊ともいえる状況において、合格者たちの中で急速に仲間意識が芽生えていく。そこには、歌の上手下手を競い合うものという感覚はなく、一緒にやる仲間同士といったもののようである。仲間意識は本選に向かってより固いものになっていき、昨日まで知らないもの同士だったとはとても思えないほどの連帯感が生まれていく。出場者の中にはカラオケコンテストなど、歌のうまさを競う大会の出場経験者も結構いるが、これらの人たちの多くが「のど自慢は歌の大会と全然違う」と言い、「みんなでやるからいい」「大勢でやるから感動する」「一緒に緊張して一緒に頑張る仲間」ということを強調する人たちが多く、大会で偶然出会った歌の好きな人たちと一緒に舞台を作ると感じている様子がかがわれた。また、予選から一夜明けただけとはいえ、非常に密度の濃い時間と過程を経て、出場者たちの顔つきや振る舞いは「合格者」から「のど自慢のメンバー」のそれへと変わっているように感じた。特に、最近では、人が歌っているときに、他の出場者たちが一緒になって振り付けの応援をする傾向にあるが、そのような振り付けの練習も出場者同士の連帯感を強めることに作用していた。

本選では、ゲストと出場者たちのコミュニケーションも始まる。ゲスト歌手2組は私服のまま舞台上で音合わせを行なうが、この時に出場者は会場席の前列で見ている。例えば、厚木大会のゲストの一人である北島三郎氏は、リラックスした状態で、出場者たちに向かって微笑みかけながら唄う。座っている出場者たちは喜び、手を振ったりしながら間近のゲストに声援を送る。その空間だけ、ある種の一体感が出来上がっているようにみえた。また、合格者の中にその日のゲストの歌を歌う出場者が必ずいるが、北島三郎氏は自分の歌を歌う出場者に対して、「せっかく出会ったんだから一緒に歌おう」と出場者と舞台上で一緒に歌っていた。どのゲストも出場者に対して暖かく、気軽に接していたが、これはプロ・アマに関係なく「歌の好きな人が出会っ

て一緒に楽しんでいるような雰囲気」を醸しだし、「のど自慢」に参加しているメンバーであるという一体感を作ることに貢献していると感じさせる。当然、これは本番のムードを盛り上げる意味でも、よい形で反映されていた。

司会と出場者の関係は、予選からすでに構築されつつあるが、本選のリハーサルでさらに関係が強くなるようである。司会は出場者一人ひとりにアドバイスを与えたり、声を掛けたりする。本番を前に緊張している出場者らにとって、司会は頼もしい味方である。そして司会から「頑張るぞ!」と声を掛けられると、「おー!」と出場者らが返すように、いつの間にかここにも連帯感が生まれている。

予選で会場に来ている観覧者との間に一体感が生まれたように、本選ではさらに会場全体に強い一体感が出来上がる。フロアディレクターから、会場に応援に来ている人(段幕やポスターを持っている人たち)に声を掛け、どこに何があるかをカメラで確認する。さらに、会場の人たちと拍手の練習をする。フロアディレクターの楽しい前説で、会場が盛り上がったところで、司会が登場する。予選と同様に、気軽で楽しいのりで会場と掛け合いを行なったあと、出場者らの登場となる。この時点ではまだ番組は始まっていないにもかかわらず、出場者に向かって会場から大きな声援や拍手がおこる。会場の人たちにも、司会から「テレビカメラで写したい顔、つまり笑顔」が求められる。そして、会場を含め、全員で番組の冒頭部分のリハーサルを行なう。本番数分前には会場全体に気合を入れ、司会、スタッフ、関係者、そして観覧者全員で12時15分の本番を迎えるという段取りである。

このように、予選から本選を通して、さまざまな過程において、構成メンバー同士がコミュニケーションしながら良い関係を構築していく。最も重要なのは、出場者や観覧者といった外部の参加者に対して、NHKスタッフやアナウンサーが放送スタッフというよりも人として接し、触れ合おうとする態度や姿勢であろう。これは演出にも見事に反映されており、短時間の間でこれだけ大勢の知らないもの同士の間一体感をもたせることに成功している。

## ②見えない部分の演出

舞台の裏側で起きているのは、コミュニケーションだけではない。画面に

植田 康夫（代表）

は映らないが、実はさまざまな演出や企画が行なわれている。例えば、予選会では250組が唄い終わり、合格発表になるまで、出場者や観覧者は40分ほど待たなければならない。この時間に会場の人たちが参加できるようなアトラクションが行なわれる。厚木大会では、会場の人たちと一緒に、ジャンケン大会が行なわれた。司会は若手のアナウンサーで、ジャンケンに勝ち残った人たちは景品がもらえるというものであった。同様に子供のジャンケン大会も行なわれた。また、恵庭市では土地柄を反映してか、民謡を唄う出場者が多かったが、アトラクションでも民謡教室が行われた。会場から民謡を唄うボランティアを舞台にあげ、チョイサ節という北海道の祝い歌「今日は楽しい、自慢ののどで、地獄天国、あと五分あと五分」という節を練習する。会場で見ている人たちも一緒に歌うような演出となっている。合格発表を聞かずに帰ってしまう人や、会場の外に出てしまう人もいるが、少なくとも、残った人たちへのサービスは徹底している。

会場の外でもさまざまなイベントが行なわれている。その一つが、会場ロビーに設置されたハイビジョンテレビである。これは、出場者たちが歌っている映像を、大きく美しいハイビジョンモニターで見せるというものである。本人が歌った映像がモニターに流れるまで30分ほど時間差があるため（ブラス再生）、歌った当事者も自分が歌っている映像を見ることができる。予選は通常放送されないため、合格できなかった出場者にとっては、唯一、画面で自分の唄う姿を見る機会である。そして、このモニターテレビの前には常に人が集まって見ていた。それ以外にも、のど自慢関連商品の販売なども行なわれており、一般では買えないような商品を出場記念に買っている人たちも結構みうけられた。既に述べたように、本選では放送終了後にゲストの歌手が2曲ずつ歌うというアトラクションが用意されている。このアトラクションは、事前に告知されないため、本選当日に知った観客たちにとっては驚きであり、これだけでも得した気分になれるのである。また、ゲストもコンサートとは違って、ある種リラックスしたムードで唄う。例えば、恵庭市のゲストの一人、松原のぶえさんが、「久々にのど自慢に出させていただき、皆様の歌をきいて私も頑張らなくてはいけなくて奮い立ちました。有難うございました」と言ってから唄い出したが、これには会場全体は拍手喝采だった。

このように、画面からは見えない部分で、参加した出場者や観覧者たちを



楽しませ、満足させる、さまざまな演出や企画が施されているが、20組の本選出場者以外に「のど自慢」に参加した人たちを如何に満足させ、また来たい、あるいは、また見たいと思わせるか、ということが、実はこの番組を継続させていく上で大事であることが分かるだろう。フロアディレクターも本選の前説で、「のど自慢は歌が上手いだけじゃありません。落ちた人も再度挑戦してください」と20組に選ばれなかった人や応募で落選した人への配慮を忘れない。また、宮川アナウンサーは「予選で落ちた230組と心を砕くことが大切。どうせ、俺なんかと思ってもらっては困る。これが60年続いている理由」と語っていたが、本選に出られない人たちに、いかに満足してもらうかを意識していることがうかがえる。画面に映るか映らないかにかかわらず、そして、本選に出場するかしないかにかかわらず、「のど自慢」に参加した誰もが楽しんで満足できる状態は、参加者の雰囲気や表情に如実に表れ、したがって、会場全体の雰囲気を大きく左右するだろう。このような参加者の満足は画面を通して視聴者にも伝わるのだろう。

### ③地域の元気という合言葉

「のど自慢」は、全国津々浦々、小さな町から大きな都市にいたるまで、さまざまな土地で開催されることから、地域との関係を強めるメディアのイベントと考えられる。特に大きな行事が少ない小さな市町村にとっては貴重な地域イベントである。宮川泰夫アナウンサーは著書『宮川泰夫の「のど自慢」がゆく』（2000年）の中で次のように書いている。

全国には3200ほどの市町村があるそうです。「のど自慢」が一年にお訪ねする市町村は約50カ所ですから、単純計算すると、「わが町に「のど自慢」がやって来る」のは64年に一度という確率になります。その意味では、地元にとって「のど自慢」は何十年に一度のお祭りと言えるのかもしれませんが。<sup>44</sup>

さらに最近では市制記念や自治体などの建造物のこけら落としといった祝賀の記念行事として各地で招聘されるケースが非常に多くなっている。「の

---

<sup>44</sup> 宮川泰夫『宮川泰夫の「のど自慢」がゆく』2000年、毎日新聞社、140頁。

植田 康夫（代表）

ど自慢」の開催地区は、このような招聘のリクエストで半年以上先まで決まっている状態であり、「のど自慢」と地域の密着関係は、ますます強くなっている。この地域と放送との関係を考えると、単純に各地をまわって放送される歌の番組というよりも、「のど自慢」という、その貴重な機会を通じて、その地域を外に向けてアピール・発信する役目を担う重要なイベントになっていると言えるだろう。司会やイベント開催に直接関わった関係者は、例えば「恵庭の元気を日本、そして世界へ」あるいは「愛知の元気を伝えよう」と開催地域を外に向けて発信することを出場者や観覧者に繰り返し強調する。ここで注目すべきは、「恵庭」ではなく「恵庭の元気」、「愛知」ではなく「愛知の元気」なのである。つまり、単なる地域だけではなく、「地域の元気」が重要なのである。そして、これは出場者の選択や紹介にも大きく関係していく。番組ではその地域の歴史、観光名所、名産品といったものはもちろん紹介されるが、地域の元気をアピールする上で、最も重要なのは、やはり地域で元気に生活している人々なのである。「のど自慢」で選ばれる人たちは、唄が上手いだけではなく、地域の名物的な人物、その土地で元気に働く人、年齢に関係なく元気な人、苦労はしているけど前向きに頑張っている人、何かに挑戦している人、といった人々なのである。言い方をかえれば、元気で、自分というアイデンティティをもって地域で暮らす人たち、あるいは地域に関係のある人たちが「のど自慢」では好まれるといえよう。

予選に出場する250組については、基本的に出場応募者から抽選で無作為に選ばれる。年齢や性別など、余程の偏りがない限り調整はしない。したがって、予選に出てくる人たちは恣意的に選ばれてはいない。この人たちの中から、何かを基準に本選出場者は選ばれていくわけである。「のど自慢」に応募する人たちの間では、どうしたら合格するかといった情報がよく交換されている。実際にどのように250組の中から合格者を選ぶのかとの質問に対し、宮川アナウンサーは「見ていれば大体分かりますよ、誰が合格するか」と答えたが、実際に私たちが見ていて合格と予想した7割程度は当たっていた。最近では高齢化社会を反映して80歳以上の応募者も増えている。単に長寿なだけでは合格できない。見ていて、何か一生懸命さが伝わってくる人、驚くほど元気な人、あるいは、思わず応援したくなる人が高齢者にも求められる。合格した人は、服装や身なりは予選と同じ状態で出ることが求められる。唄以外の要素も合格にとって重要なものということがわかるだろう。また、

舞台下には司会とスタッフが待っており、唄い終わった後、簡単にインタビューされることがある。応募葉書には書かれていない情報や本人のプロフィールなどが聞かれる。唄だけではなく、「のど自慢」にふさわしい話を探していることが分かるであろう。

宮川泰夫アナウンサーは、「地方へ行けば行くほど面白い。泥臭い人、第一次～二次産業の人、あるいは、人と人が向き合っている職の人が多く」と話していたが、出場者の職業もある種、土地の色を表す。例えば、都会に近い厚木市と北海道の恵庭市では出場者の職業は異なり、そこに地元色がでる。愛知万博の場合は、特別なイベント内での開催であったため、出場者の出身地は広域に渡っていたが、合格者の中に万博関連の仕事に従事している人たち（万博会場警察を息子に持つ母親、会場案内ボランティア、会場の消防士など）が比較的多かった。その土地ならではの職業、あるいはその土地のために頑張っている人というのは、地域と元気の両方をアピールできる大事な人たちなのである。「この番組を見ると元気になる」あるいは、「ふるさとも感じる」という視聴者が結構多いが、それは、こういった人たちが歌う姿を見るからであるといえよう。宮川アナウンサーのような内部関係者が「日本はまだ大丈夫だと、のど自慢を見ていると思う」と感じるのであれば、「のど自慢」の視聴者が、唄の上手下手だけでなく、その歌手、そして会場にいる元気な観覧者の姿で、各地域の元気、ひいては日本の元気を感じることは当然といえよう。

## 2-2 まとめ

本研究では、「のど自慢」の舞台裏で、人間らしい出会い、触れ合い、そしてかわりあいがどのように起こっているのか、考察を行なった。「のど自慢」の制作現場で発生している人間的なコミュニケーションは自然に起こっているわけではなく、それが番組にとって非常に重要であると放送局側が位置付け、意識的な行動や企画、そして演出が、制作過程の中で具現化されることによって発生しているとみられる。予選や本選に参加する出場者は当然のこと、「のど自慢」の全ての参加者に対して、放送局（NHK）関係者が、一人の人として参加者たちと触れ合おうとしていることが、出場者や観覧者とよい関係の構築に繋がっていくのである。既に述べたように、日本各地の元気を届けることは「のど自慢」にとって重要なことであるが、視聴者

植田 康夫（代表）

が画面を通して地域の元気を感ずるためには、元気な人たちが元気に歌えるような、一体化した舞台づくりが土台となる。

開催場所が毎週違い、唄う人も毎回違うという、常に変化が伴う状況で、それでも「のど自慢」に関わる全員が、一体感を持って作れるということが、実際の「のど自慢」制作にとって不可欠である。出場者や観覧者、ゲストが毎回異なるだけでなく、スタッフも開催地域によって担当する放送局が異なることから、ホスト局としての取り組み方も多少違いが出てくる。このような状況にあっても、「のど自慢」制作スタッフは、面識のない構成メンバーたちを短時間でまとめ、スムーズに機能させて番組にしていかなければならないわけである。そのような理由からも、メンバー間のコミュニケーションを円滑にすることは「のど自慢」成功のための最も基本となる。「のど自慢」に参画するメンバーの一体感維持は絶対に不可欠なものと理解されよう。番組は毎回同じ構成ではあっても、構成メンバーが異なり、場所が異なれば、「のど自慢」の中身は毎回違うわけで、これはまさしく、宮本アナウンサーが「筋書きのないドラマ」と読んでいるとおりでいえよう。言い換えれば、常に新鮮な地域の元気を伝え続けていることが、「のど自慢」の大きな筋書きであり、これが何十年も見られている秘訣と考えることができる。そして、これは作り手と受け手が互いに求める「のど自慢」の姿だともいえよう。

「のど自慢」は二日間の濃密な過程を経て制作される。その中のたった45分が「のど自慢」として放送されるわけである。では、その45分のテレビ放送において、テレビ画面から、何が視聴者に伝えられているのだろうか。その問いに答えるために、放送された番組の内容分析を行なった。次のセクションではその結果についての報告を行なう。

〔金山 智子〕

### 3 「のど自慢」の番組内容分析

制作者がどのような視点で番組を構成し、演出を行うかという送り手側のアクションは、それが意図的かそうでないかによらず、実際に視聴者に届けられる番組コンテンツに反映される。前節では、「のど自慢」の舞台裏の観察によって、この番組がどのような意図をもち、制作者や参加者がどのようなコミュニケーションによって制作されているのかについて考察した。本節では、実際の放送内容を詳細に分析することにより、「のど自慢」が番組と

して発信するメッセージがどのようなものかを見出すことを目的とする。

「のど自慢」は視聴者参加型番組の体裁をとってはいるものの、非常に強固なフォーマットを有している。鐘の音で始まるテーマ曲で出場者が入場行進を行い、続いて司会者がVTRと共に開催地を紹介する。そして、20組の出場者が順番に歌い、最後にゲストが自身の歌を披露、最後に「今週のチャンピオン」が発表される。出場者は250組以上が参加する予選会を「勝ち抜いた」精鋭たちである。

「のど自慢」は、その番組名が示すように、あくまでも出場者を中心とした視聴者参加型のコンテスト番組であるという体裁を有しているように見える。しかし、テレビの前でオンエアを見ると、「のど自慢」という番組名を冠しているにもかかわらず、出場者全てが歌唱力で予選会を「勝ち抜いた」とは考え難いという側面も否定できない。先の参与観察においても、歌唱力だけでなく、地域で元気な人が選ばれるということが報告されているように、出場者20組は何らかの理由で選ばれている可能性がある。

では、彼らが出場者として選ばれた理由は何であろうか。「のど自慢」の厳格なフォーマットにおいては、その大部分が定型化された客観的アナウンスによって支配されている。番組の主役である出場者にスポットライトが当たるのは、司会者が出場者を紹介する箇所（出場者の歌唱前）、出場者が熱唱し鐘の音によってそれが終了するまでの限られた時間、そして司会者がゲストを交えて出場者と会話を行う箇所（出場者の歌唱後）に限られる。つまり、出場者が何者であるかについて視聴者が知ることのできる手がかりは、歌唱部分を除いた、わずかな紹介の時間からしか得られない。したがって、「のど自慢」の出場者が選ばれた理由は、彼らがどのように紹介されるか、そして彼らと司会者がどのようなやり取りを行うかを丁寧に追うことにより見えてくると考える。参与観察で考察されたように、出場者については、予選の際に、直接スタッフや司会者がインタビューして話を聞き、その情報は番組時の出場者紹介のもととなる。つまり、「のど自慢」が提示するメッセージは、番組の主役である出場者をどのような人として紹介するのかによっていると考えられるのである。

以上の観点から、本章では、実際に放送された「のど自慢」出場者の歌唱前後に展開される司会者のコメント、出場者やゲストとのやり取りを中心に分析を行い、出場者を通じて番組がどのようなメッセージを視聴者に届けよ

植田 康夫（代表）

うとしているかについて探る。番組の中に登場する歌手が、どのような形で存在しているかを探ることは、番組に込められた意図的なメッセージそのものを明らかにすることであり、それをもとに、この長寿番組を支え続けるメッセージとはどのようなものであるかについて考察を行なう。

### 3-1 分析方法

「のど自慢」に込められたメッセージの分析を行なうにあたり、2004年に放送された「のど自慢」（49回放送）から、開催地域が偏らないように考慮した任意の22回分（下記の表参照のこと）を抽出した。そして、各番組45分の中から、出場者の歌唱前後に展開される司会者（宮川アナウンサー）・ゲスト・出場者のやり取りを全て書き起こした。分析単位は、出場者ごとであり、分析総数は440事例（22回×20組）であった。

続いて、最初の40事例について予備分析を行い、事例ごとに適切なテーマ（グループ名）を名付けた。類似したテーマのものは同一グループとして分類した。以降、残りの400事例についても分類を行い、予備分析で設定された既成グループに含めることができないものには新たなテーマを付すという作業を繰り返した。複数のテーマが含まれる事例もあったが、本分析は量的比較が目的ではないため、より強い印象を受けるテーマグループに分類した。

表3-1 「のど自慢」の内容分析事例対象リスト

|                     |
|---------------------|
| 平成16年4月18日（岩手県花巻市）  |
| 平成16年5月9日（長崎県琴海町）   |
| 平成16年5月16日（山梨県山梨市）  |
| 平成16年5月23日（島根県広瀬町）  |
| 平成16年5月30日（新潟県糸魚川市） |
| 平成16年6月13日（兵庫県川西市）  |
| 平成16年7月4日（福井県敦賀市）   |
| 平成16年7月25日（広島県東広島市） |
| 平成16年8月1日（愛媛県四国中央市） |
| 平成16年8月15日（宮城県白石市）  |
| 平成16年8月29日（北海道松前町）  |

|                       |
|-----------------------|
| 平成16年 9月12日 (岐阜県飛騨市)  |
| 平成16年 9月19日 (沖縄県沖縄市)  |
| 平成16年 9月26日 (栃木県西方町)  |
| 平成16年10月31日 (大分県杵築市)  |
| 平成16年11月 7日 (秋田県秋田市)  |
| 平成16年11月14日 (千葉県旭市)   |
| 平成16年11月21日 (静岡県藤枝市)  |
| 平成16年11月28日 (京都府久御山町) |
| 平成16年12月 5日 (群馬県館林市)  |
| 平成16年12月12日 (宮崎県高城町)  |
| 平成16年12月19日 (高知県中村市)  |

その結果、特にテーマが見当たらない「q. その他」を含め、17のグループ(a～q)が見出された。つまり、440事例全てが17の意味グループに集約されたわけである。さらに、各グループを高次の抽象レベルで統合して、5つの上位カテゴリー(A～F)を作成した。以下が作成されたカテゴリーリストである。

- A. 人生の演出装置
  - a. 人生の節目・記念・ステップアップのきっかけ
  - b. 将来の夢      c. できなかったことを実現
  - d. ゲストへの思い
- B. 歌という贈り物
  - e. 大切な人へ届ける歌      f. 故人を思い出して
- C. 明るく元気な人生
  - g. 病気・不幸への励まし      h. 元気な老人
- D. 地元の産業・文化
  - i. 地元の産業・文化のアピール
- E. 盛んな交流
  - j. 仲良し      k. 人気者      l. ソーシャルワーク
  - m. 国際交流      n. Uターン

植田 康夫（代表）

## F. ユニークなアピールポイント

o. ユニークな属性      p. NHKとの関連性      q. その他

### 3-2 分析結果

以下では、生成されたカテゴリリストに基づいて、それぞれのカテゴリや、カテゴリを形成する各グループがどのような意味を持つのかについて考えてみたい。

#### A. 人生の演出装置

「A. 人生の演出装置」と名付けた最初のカテゴリには「a. 人生の節目・記念・ステップアップのきっかけ」「b. 将来の夢」「c. でできなかったことを実現」「d. ゲストへの思い」という4つの下位グループが含まれる。このカテゴリに共通するのは、「のど自慢」への出場が出場者自身の人生にとって大きな意味を持つとされている点だ。

例えば、「A. 人生の節目・記念・ステップアップのきっかけ」に分類される事例では、「のど自慢」出場が、出場者の人生にとって通過儀礼の意味を持つものとして提示される。

（5月9日 長崎県琴海町-2「さくら」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次はこの春、大学に入学。別れと門出の気持ちにピッタリの曲です。

（7月4日 福井県敦賀市-15「悲しいKiss」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次はこの夏、オーストラリアに留学します。出発にあたって自分へのエールです。

（9月26日 栃木県西方町-11「Go the Distance」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は大学4年生、就職活動中です。この出場をバネにしたいと思っています。

（9月12日 岐阜県飛騨市-17「CAN YOU CELEBRATE?」歌唱後）

宮川アナ：子育て真っ最中だそうで？ 何かまた嬉しいことがあった？



出場者：実は一昨日なんですけど、産婦人科の方に行きましたら、妊娠反応が。

宮川アナ：あら、二人目ができたかもしれない？

出場者：かもしれないんです。

宮川アナ：おめでとうございます。

司会者は、出場者が入学・卒業・就職・結婚・出産などのライフサイクルの節目に「のど自慢」に参加していることを強調する。そして、彼らの人生の節目を共に祝い、激励するというスタイルで出場者に接する。この意味において、「のど自慢」は出場者の人生の節目で彼らを祝福・激励する舞台装置として機能していると言える。

出場者を激励するという意味では「b. 将来の夢」も同様の側面を有している。例えば、次の例では、「のど自慢」は歌手になりたいという夢を持つ若者を肯定して激励する場として機能していることが分かる。

(7月25日 広島県東広島市-2「太陽のKiss」歌唱前)

宮川アナ：さあ、次は高校3年生。歌手になることを夢見ています。

(11月21日 静岡県藤枝市-12「ありがとう」歌唱後)

宮川アナ：そう、将来は音楽の道に進みたい？

出場者：2年以内にデビューします。

宮川アナ：そうか。

出場者：で、紅白に出るんでみんな見てください。お願いします！

さらに、将来に対する夢だけでなく、「c. でできなかったことを実現」する場としての側面も見られる。次の事例では、「のど自慢」の本選への出場を目指し続けている参加者に対して、その努力を労う形でコメントが付されている。さらに、高校時代の制服がブレザーであったことからセーラー服に憧れる出場者に対して、その憧れを実現させる場を「のど自慢」が提供している事例も見られる。

(5月23日 島根県広瀬町-20「恋のバカンス」歌唱前)

植田 康夫（代表）

宮川アナ：さあ、今日最後の方になりました。二人で挑戦すること5回目。  
見事初出場です。

（11月28日 京都府久御山町-2「セーラー服を脱がさないで」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は高校時代の仲良し。セーラー服に憧れた気持ちを歌います。

ところで、「のど自慢」には毎回2人のゲスト歌手が招かれている。彼らは、番組の最後に自身の歌を披露するだけでなく、司会者に促されて出場者へのコメントを行うなど積極的に出場者に関わっている。

興味深いのは、ゲストの歌を本人の前で披露する出場者が例外なく存在することである。しかも、分析対象とした22回分の放送では、その全てにおいて各ゲストに対して2組、つまり出場者20組中4組が必ずゲストの歌を歌っている。22回分の分析全てにおいて、4組が必ずゲストの曲を歌っているという事実が偶然の所産であるとは考え難い。実際には、ゲストに沿った出場者が選ばれた可能性が高いと思われるが、少なくとも「のど自慢」の出場者が歌唱力のみで選抜されたわけでないことを示す的確な例であろう。

彼らは、20組の前半（5番目前後）と中盤（12番目前後）に配置され、「ゲストの熱烈なファン」「ゲストとのエピソードを持つ出場者」として紹介される。そして番組上は「d. ゲストへの思い」が「のど自慢」に出場することによって遂げられたという演出が成立している。

（5月16日 山梨県山梨市-4「きよしのドドンパ」歌唱後）

宮川アナ：（氷川が）山梨においでになったときコンサートに行ったって？  
出場者D：はい。で、きよしくんが小林ファミリーのために『小林サンバ』  
を歌ってくれたんで今日はそのお礼で歌いました。

氷川きよし（ゲスト）：ありがとうございます。

宮川アナ：ステージで歌ってあげたんですか？ この家族のために？

氷川：そうです。クイズに正解した方は。

（11月7日 秋田県秋田市-10「MICKEY」歌唱後）

宮川アナ：はい、集まって。みんな同じ制服、かわいい制服ですけど、こち

ら高校はどちらですか？

出場者A：角館南高校です。

宮川アナ：角館南高校ということは藤さんの後輩！

藤あや子（ゲスト）：我が母校のみんな。さすが美人ぞろい。素晴らしかった。良かったわよ。

宮川アナ：藤さんがテレビで活躍してるのを見ると、高校生、現役の高校生はどう思ってますか？

出場者B：すごい誇りに思ってます。

これらの事例では、「のど自慢」は、氷川きよしのライブで特別サービスを受けた家族が「そのお礼」を行う場として、また「すごい誇りに思っている藤あや子に会える場として機能している。同様の事例は多く見られ、ゲストと出場者とのエピソードがほぼ毎回展開されている。司会者や出場者から病床の身内に個人的なメッセージを送ることを促されたり、簡単な歌唱指導を依頼されたりすることも少なくない。

以上、「a. 人生の節目・記念・ステップアップのきっかけ」「b. 将来の夢」「c. できなかったことを実現」「d. ゲストへの思い」という4つの下位グループを見てきたが、これらの事例で「のど自慢」は、全て出場者の「A. 人生の演出装置」として機能している。もちろん、「のど自慢」が出場者にとって「A. 人生の演出装置」となることは、一般視聴者にとって大きな意味はない。しかし、出場者が祝福され、激励されるというポジティブな表現が存在し、その喜びや向上心が画面に映し出されていることは確かである。

## B. 歌という贈り物

前述の「A. 人生の演出装置」が出場者本人に向けられたものであったのに対して、「e. 大切な人へ届ける歌」「f. 故人を思い出して」という下位グループを持つ「B. 歌という贈り物」のカテゴリーは、出場者が第三者に歌を贈るという構図である。

まず、「e. 大切な人へ届ける歌」に分類される事例では、「のど自慢」が一種の告白の場として機能していることがうかがえる。単身赴任中の父親が子どもたちに贈るといような例もあるが、普段直接言えないことを、「の

植田 康夫（代表）

ど自慢」という大舞台で歌うことで表現するというパターンが多く見られる。

（7月25日 広島県東広島市-19「夫婦ごころ」歌唱後）

宮川アナ：『夫婦ごころ』。あまりこういう感謝の気持ちは口に出せない？

出場者：そうですね。歌ですね。

宮川アナ：でも、今日はしっかり伝わったと思います。

（8月15日 宮城県白石市-7「父娘坂」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は去年娘が結婚しました。式で歌えなかった父の気持ちです。

「e. 大切な人へ届ける歌」と同じく、第三者に歌を贈るという構図であっても、「f. 故人を思い出して」には哀悼の意味も付与される。本節の冒頭で引用した事例もこのグループに含まれる。

（8月1日 愛媛県四国中央市-2「ヤンザラエ」歌唱後）

宮川アナ：ひいおばあちゃんに聞かせてあげれなかったってどういうことなんでしょうか？

出場者：ひいおばあちゃんが2月の誕生日会の前に亡くなってしまって。

宮川アナ：あら。

出場者：誕生日会のときに歌ってあげることができなかった。

宮川アナ：準備していたんだけど歌ってあげられなかった？

出場者：はい。

宮川アナ：その代わりに今日のはど自慢で、放送を通して天国に聞こえたよね？

出場者：はい。

（11月14日 千葉県旭市-19「鳥取砂丘」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は8年前亡くなった息子さんへ大好きな曲を届けます。

このように、「のど自慢」に出場することで、彼らは「大切な人」や「故人」に「B. 歌という贈り物」を行う。これによって、普段言えなかったメッ

セージを伝え、出場者は大切な人を失った悲しみを慰める。特に、「故人」に対して成し遂げられなかった後悔があるならば、出場者は「のど自慢」の「放送を通して天国に」その思いを伝えることになる。「のど自慢」で哀悼歌を捧げるという一種の宗教的儀礼を経て、出場者のネガティブな感情は解消されるように演出される。そして、明日の人生を前向きに迎えるように促されるのである。

### C. 明るく元気な人生

「C. 明るく元気な人生」と名付けられたカテゴリーには、「g. 病気・不幸への励まし」「h. 元気な老人」という下位グループが含まれる。いずれもが、出場者の属性に起因するものであり、本来的にネガティブな要因がポジティブな姿勢へと転化されている構図を見ることができる。

例えば、「g. 病気・不幸への励まし」には、病気や事故に遭った出場者自身が歌の力によって慰められ、救われているという位置付けが見られる。また、被災者への応援歌として示されているものもある。

(5月9日 長崎県琴海町-14「酒に酔いたい」歌唱前)

宮川アナ：さあ、次の方は若くして失明しましたが、歌が支えでした。

(5月23日 島根県広瀬町-13「帰港節」歌唱後)

宮川アナ：6年前ですか、大きな手術を、心臓の？

出場者：そうなんです。

宮川アナ：今、どんな状態？

出場者：ペースメーカーと。

宮川アナ：ペースメーカー？

出場者：大動脈弁、僧帽弁、全部換えて。

宮川アナ：人工の弁2つとペースメーカーもつけていらっしゃる？

鳥羽一郎(ゲスト)：そうですね。

宮川アナ：一時は声も出なかった？

出場者：それで6年前に手術して、2年ぐらいは声も出なくなってたんです。

歌えなくなって。でも先生が『歌って声を出した方が肺のためにもいいから』ということ。

植田 康夫（代表）

（12月19日 高知県中村市－1「男の夜明け」歌唱後）

宮川アナ：今年はね、地震や災害が多い年でした。そういう災害に遭われた方々への応援歌として歌った？

出場者：はい。

宮川アナ：どのへんに一番気持ちを入れましたか？

出場者：『夢を捨てずにいる限り きっと幸せがくる』ということです。

宮川アナ：頑張ろうということですね。

上記の事例からも分かるように、司会者との掛け合いを通じて、ネガティブな事実はポジティブな姿勢へと転化されている。これらの事例に見られる司会者の誘導は巧みであり、最初はネガティブな側面を公表するところから始めている。そして、会話の過程で出場者自身が肯定的立場を主張することにより、前向きな結論へと導いていく。

同様に、加齢に関しても「h. 元気な老人」が登場することで、ポジティブな視点が提示される。実は『のど自慢』には、ほぼ毎回、高齢を大々的に紹介される出場者が登場している。そして、その全てが健康的であり、仕事を現役で続けていたり、趣味を楽しんでいたという点が強調される。

（9月12日 岐阜県飛騨市－8「大井追っかけ音次郎」歌唱後）

宮川アナ：お元気で。おいくつになられますか？

出場者：92です。

宮川アナ：布施さん、92歳。

布施明（ゲスト）：いや、すごいです。ホントにすごいです。

宮川アナ：みっちゃんすごいです。

中村美律子（ゲスト）：ホント、歳聞くまで分からへんからビックリしました。

布施：そのお声はホントにすごいです。

宮川アナ：もう、ここに立ってるだけで神々しいという気がいたしますが。

（9月26日 栃木県西方町－7「川」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は何と95歳。今もお豆腐作り現役です。

病気・事故・被災・加齢は、その対照と比べると一般的にネガティブなものとして認識されている。だが、「のど自慢」は、そのネガティブな事実を

受け入れて「C. 明るく元気な人生」を楽しむ彼らを肯定的に提示し続けている。このグループに分類される出場者が「合格」することはほとんどない。だが、「のど自慢」は、「合格」以上に彼らを称える。歌唱後のインタビューに割かれる時間もこのグループが圧倒的に多く、このことから、彼らが特別な存在として選ばれていることが推察できる。

#### D. 地元の産業・文化

「のど自慢」は、日本全国（時には海外）で開催されており、番組冒頭では開催地紹介のVTRが流されるなど、地域との密着性を感じさせる。したがって、その地域にとって象徴的な職業や、地域振興に関わりのある人物が出場者として画面に登場することも少なくない。便宜上「D. 地元の産業・文化」という上位カテゴリーを設けたが、これらは全て「i. 地元の産業・文化のアピール」として包括できる。

（5月16日 山梨県山梨市-12「世界に一つだけの花」歌唱後）

宮川アナ：今日は『世界にひとつだけの花』を選びました。どんなお気持ちで？

出場者D：僕たちが心を込めて作った果物っていうのは、ひとつひとつ、まさに世界にひとつだけしかないものです。それをみんなに食べてもらいたいと思って頑張ってます。

宮川アナ：どうぞ美味しい果物を作ってください。

（5月23日 鳥根県広瀬町-18「人生半分」歌唱後）

宮川アナ：2004年、この夏に高校総体が開かれる？

出場者：はい。

宮川アナ：どんな形で？

出場者：鳥根県を中心にですね。

宮川アナ：ここの鳥根県がメイン会場？

出場者：はい、中心です。中国5県で開かれます。

宮川アナ：他にも中国5県で開かれる。いつからですか？

出場者：一応8月1日に県立浜山公園の陸上競技場で総合開会式を行います。

宮川アナ：24日までと書いてありますね。どんなお気持ちで今？

植田 康夫（代表）

出場者：準備は万全にしておりますので、全国の高校生諸君、地区の予選を勝ち進んで頂きまして、特にこの島根県へおいでください。おもてなしの心を持ちまして、高校生約2万5千人と県民あげてお待ちしております。どうぞおいでください。ありがとうございました。

宮川アナ：だそうでございます。こういうマジメな方が事務局をやっているんですよ。ありがとうございました。

（5月30日 新潟県糸魚川市－11「好きになった人」歌唱後）

宮川アナ：糸魚川市から生まれた「スポレック」というスポーツがあって、これどういうものなんですか？

出場者：はい、このプラスチック製のラケットで、このボールを、スポンジ製なんですけど、打ち合う室内のミニテニスです。

宮川アナ：ルールはテニスのようなもので？

出場者：はい。

宮川アナ：今もう全国的にも広まって？

出場者：はい、全国的にも広がって。

宮川アナ：全国大会も開かれる？

出場者：11月には第4回全国大会が糸魚川で開かれます。

（8月1日 愛媛県四国中央市－12「まつり」歌唱後）

宮川アナ：ありがとうございます。祭のハッピー衣装で。これが秋祭りの？

出場者：そうです。

宮川アナ：太鼓台を担ぐそういうお祭だそうで？ どんな様子なんですか？

出場者：ええ、2トンに余る太鼓台に、重（じゅう）とか棒端（ぼうばな）とかかき棒の上とかに10人の人が乗って。特に重要なのが4人のかき棒の指揮者の人で。

宮川アナ：何人ぐらい担ぎますか？

出場者：約200人の人がその指揮者の指示に従って。

宮川アナ：それが何台も出る？

出場者：そうですね。もう20台ぐらい。この向かいのふるさと広場で賑やかに行われます。



(9月12日 岐阜県飛騨市-9「ね～え？」歌唱後)

宮川アナ：市役所の広報担当だそうで？

出場者B：はい、そうです。

宮川アナ：この新しい市、飛騨市、どうぞひとことPRを。

出場者B：飛騨市。匠の文化、宇宙科学の文化、そして溢れんばかりの自然。

たくさんありますが、一番自慢したいのは飛騨市を訪れたみなさんに『よう来てくれんさったな』ってお迎えくださるみなさんのもてなしの心です。

(12月5日 群馬県館林市-15「君だけのTomorrow」歌唱後)

宮川アナ：子どもたちに今レスリングを教えて。とっても盛んなんですってね、レスリングが？

出場者：そうですね。館林は全国高校総体、第1回が開催された土地です。

先に示した「i. 地元の産業文化のアピール」は、どの放送回にも数事例見られる。農漁業・畜産業だけでなく、伝統工芸や地域イベントに関わる人々が、時にはそれぞれの衣装を被って登場する。「のど自慢」は全国各地で開催されるため、「D. 地元の産業・文化」もバラエティーに富んでおり、先述した「C. 明るく元気な人生」と同様に多くの時間が彼らに割かれる。このことは、「のど自慢」という番組に地域紹介という別の側面が色濃く存在していることを反映しており、その具現者として「D. 地元の産業・文化」に関わる人々が選ばれていることを示していると言える。

## E. 盛んな交流

地域に焦点を当てたカテゴリーは産業・文化といったアピールだけではない。「のど自慢」には、その地域に暮らす人々が「E. 盛んな交流」を行っていることを暗示する出場者が登場する。このカテゴリーには、「j. 仲良し」「k. 人気者」「L. ソーシャルワーク」「m. 国際交流」「n. Uターン」という下位グループが見られる。「j. 仲良し」や「k. 人気者」は、司会者が頻繁に用いているキーワードである。

(5月16日 山梨県山梨市-7「銀座の恋の物語」歌唱前)

宮川アナ：さあ、次はおじいちゃんと孫のデュエットです。いつも仲良く歌っ

植田 康夫（代表）

ています。

（6月13日 兵庫県川西市-10「島人ぬ宝」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次はソフトボールのライバルチーム同士。今日は仲良くコンビを組みます。

（9月26日 栃木県西方町-12「だいじな人だから」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次の方は、それぞれの息子と娘が婚約しました。その前に母親同士がすっかり仲良くなりました。

（12月12日 宮崎県高城町-2「嗚呼、青春の日々」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は幼稚園からの仲良し。20年来の付き合いです。

（8月15日 宮城県白石市-12「望楼の果て」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次の方、歌と踊りでボランティアをしています。街の人気者です。

（11月28日 京都府久御山町-17「DESIRE」歌唱後）

宮川アナ：久御山町の町役場の窓口にいらっしゃる？

出場者：はい、そうです。

宮川アナ：もう明日から大変ですよ、町のみなさん。人気者になってください。

斜め読みをすれば、ペアを組んで出場している時点で仲が良いことは判断できるのだが、司会者は「j. 仲良し」という言葉を執拗に、かつ年齢が若い出場者から高齢のペアにまで広く用いている感がある。「j. 仲良し」「k. 人気者」というキーワードは、温かいポジティブな人間関係を端的に表現する言葉であり、ポジティブなコミュニケーションの存在を前提とする言葉である。その意味においては、このキーワードを執拗に用いることは、開催地域の人間関係がポジティブなものであるという印象、つまり地域のコミュニケーションの肯定的側面を演出する効果を持つと推測できる。

ところで、分析を進めていくと、司会者が出場者を紹介する際に、地域産

業以外の職業についても多く言及されていることが見出された。それは、福祉・医療・教育に関わる「L. ソーシャルワーク」の人々である。

(5月9日 長崎県琴海町-18「涙そうそう」歌唱後)

宮川アナ：この街にある老人ホームの介護士さんをなさってる？

出場者：はい

宮川アナ：昨日の予選会、今日の本番と、いろいろとお年寄りにお話してあげてください。

(11月21日 静岡県藤枝市-14「涙の太陽」歌唱後)

宮川アナ：市内のデイサービスセンターの職員さんで、お年寄りの前でもときどきやったりして？

出場者A：はい、やっています。

宮川アナ：どうぞ元気に。よろしくお伝えください。ありがとうございました。

その内訳は、高齢者福祉関係だけでなく、保育士や小中学校の先生、看護婦など、決して高齢者のみを対象とした職業ではない。「1. ソーシャルワーク」に分類される事例は、少なくとも各放送に1件は見られ、多いときには3件以上ある。この点からすると、ある一定の職業が意図的に選ばれている、または選ばれやすいということが推測できる。

この点について詳しく見てみると、上の事例に限らず、出場者は所属する施設(福祉施設・医療施設・学校・幼稚園)の人々に「よろしくお伝えください」という内容のコメントを受けることが多い。逆に、会社員や同級生に「よろしくお伝えください」と言われることはほとんどない。その意味においては、「1. ソーシャルワーク」は高齢者と若い世代をつなぐ象徴的な存在として位置付けられている可能性がある。

象徴的な存在という観点からすれば、「m. 国際交流」も「E. 盛んな交流」の重要な要素である。「のど自慢」に参加する外国人は、日本語で日本の歌を熱唱する。

(4月18日 岩手県花巻市-19「雪國」歌唱前)

植田 康夫（代表）

宮川アナ：さあ、次はスウェーデン出身です。岩手の冬はスウェーデンの冬に似ているそうです。

（7月4日 福井県敦賀市-10「乾杯」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は中国からの研修生。日本語と中国語で歌います。

（8月29日 北海道松前町-13「兄弟船」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は英語指導助手としてイギリスからやってきました。鳥羽さんの演歌にチャレンジです。

さらに「のど自慢」の地域開催は、その地域を離れた若者の帰郷という象徴的演出も担っているように思われる。「n. Uターン」と名付けられたグループの事例には、「のど自慢」出場のために帰郷したことが言及されている。

（9月12日 岐阜県飛騨市-5「恋に落ちて」歌唱前）

宮川アナ：さあ、次は東京の大学に在学中。この日のために帰ってきました。

（12月12日 宮崎県高城町-17「ハナミズキ」）

宮川アナ：さあ、次はお母さんが応募してくれました。名古屋から帰省しての出場です。

コミュニティのハードな側面をアピールする「D. 地元の産業・文化」とは異なり、「j. 仲良し」「k. 人気者」「l. ソーシャルワーク」「m. 国際交流」「n. Uターン」という下位グループを持つ「E. 盛んな交流」は、地域における人と人とのコミュニケーションというソフトな側面が表現されていると言える。異なった世代・異なった国籍・異なった現状にもかかわらず、ひとつの地域を拠点とした心豊かな人間のコミュニティが形成されているといった演出が成立するのである。

#### F. ユニークなアピールポイント

「F. ユニークなアピールポイント」というカテゴリーには、o. ユニークな属性」「p. NHKとの関連性」「q. その他」が含まれる。「o. ユニ-

クな属性」とは、出場者の趣味や特技が特に取り上げられているもの、「p. NHKとの関連性」とは、歌唱曲がNHKの他番組と関連性を持っているものを指す。

(11月21日 静岡県藤枝市-9「じょんから女節」歌唱前)

宮川アナ：さあ、次は紅白歌合戦に感動して三味線を習い始めました。高校3年生、三味線を抱えての登場です。

(6月13日 兵庫県川西市-4「ブルースカイ・ブルー」歌唱後)

宮川アナ：これはね、連続テレビ小説『てるてる家族』の主題歌？

出場者A：はい、そうです。

宮川アナ：もう毎朝、ご覧頂いて？

出場者A：大ファンでした。

宮川アナ：これは舞台がすぐ近くですね。

出場者A：はい、池田市。

(中略)

宮川アナ：秋からはですね、神戸が舞台の『わかば』が始まりますんでね、どうぞそれもお楽しみに。

「q. その他」に分類された事例は、テーマを見出すのが難しいほどコメントが短いものや、際立ったキーワードが見られない数例である。だが、それらの事例を詳細に検討すると、そのほとんど全ての出場者が「合格」していることが分かった。つまり、「q. その他」に分類された事例には、歌唱力というアピールポイントが存在していると考えることができる。

以上、分析対象440事例をそれぞれのテーマにしたがって整理してみた。分析した全事例(17グループ)は、「A. 人生の演出装置」「B. 歌という贈り物」「C. 明るく元気な人生」「D. 地元の産業・文化」「E. 盛んな交流」「F. ユニークなアピールポイント」のいずれかの上位カテゴリーに統合された。すべての事例がこれらのカテゴリーに収斂されるということは、「のど自慢」の出場者として選ばれる人々には一定の傾向が存在するということでもある。以下の考察では、大部分を占めた5カテゴリー(A~E)に注目して、「の

植田 康夫（代表）

ど自慢」が提示するメッセージについて考えてみたい。

### 3-3 考察

本節の目的は、実際の放送内容から番組が提示するメッセージ——「のど自慢」という長寿番組を支え続けるメッセージ——が何であるかを見出すことであり、本分析では出場者に付与されるテーマに焦点を当ててその意味を探ってきた。

「A. 人生の演出装置」「B. 歌という贈り物」「C. 明るく元気な人生」「D. 地元の産業・文化」「E. 盛んな交流」の5カテゴリーを見ると、さらに上位の概念が浮かび上がってくる。既に各カテゴリーの項でも言及したが、これらは『のど自慢』の出場者は出場者個人がスポットの対象になる事例と、出場者が所属する地域が対象になる事例に分けられる。そして、「ポジティブな人生」（「A. 人生の演出装置」「B. 歌という贈り物」「C. 明るく元気な人生」と「明るいコミュニティ」（「D. 地元の産業・文化」「E. 盛んな交流」というふたつのキーワードで包括できると思われる。

「A」「B」「C」の各カテゴリーでは、出場者は「ポジティブな人生」を歩むように促されていた。人生の節目・大切な人の喪失・病気や加齢といった出場者の属性は全てポジティブに転化され、徹底的にネガティブな感情を排除する結論が導かれていた。つまり、「のど自慢」の出場者の多くにはこのようなドラマが期待されているのであり、逆に言えば、そのようなドラマを展開できる人が本戦出場者として選ばれていると見ることができる。

そして「D」「E」のカテゴリーでは、出場者は「明るいコミュニティ」を表現する要素として登場していた。地域開催という特性を持つ「のど自慢」は、開催地の魅力を肯定的に伝える役割を担っている。言い換えれば、その役割を担うことのできる人が出場者として選ばれると言える。

以上のことから、「のど自慢」は、「ポジティブな人生」「明るいコミュニティ」という側面を中心に成立している番組であり、それら強烈なポジティブなメッセージを徹底的に表現している番組であると結論付けることができそうだ。少なくとも、「のど自慢」は単なる視聴者参加型の歌唱コンテスト番組であるとは言えない。出場者は、最終的にポジティブなメッセージを発する存在として選ばれ、司会者はポジティブなメッセージに転化させることに努めている。「のど自慢」は、地域から発信される強烈なポジティブメッセー

ジのパッケージとして放送され続けているのである。同時に、長寿番組として愛されてきた背景には、これらのメッセージを肯定的に受け入れる視聴者が存在し続けているのである。

〔小寺 敦之〕

## おわりに

本論文では、「NHKのど自慢」の起源や番組の変容、実際の「のど自慢」制作現場の様子、そして「のど自慢」に込められたテーマの抽出を行なうことにより、日本の放送文化の象徴的な存在となっている「のど自慢」を構造的に分析・考察した。

「のど自慢」の歴史をひも解くと、非常に興味深い。現代の番組制作においても参考になるような点が多々みられる。「のど自慢」は、戦後の荒廃した社会の中で人々に「マイク」というシンボルを浸透させた意義は大きい。人生という大舞台上で、自分の歌声を日本全国の人々に届けるための「マイク」は、頑張ればいつか、夢や願いが叶い、ある瞬間に素人の自分もヒーローになれる可能性があるというメッセージを社会に送り続けた。現代では「リアリティ・ショー」が高視聴率を獲得し、各局がこぞってこのような番組制作に乗り出すという現象も発生したが、その原点は60年前に始まった「のど自慢」の中に存在していた。

「のど自慢」が素人の手を離れて、プロの歌手を生み出す場が変わろうとした時、NHKは番組の打ち切りに乗り出した。番組がスタートしてから3年、もともと意図していた「素人」のニュアンスが大きく曲解され、「のど自慢」がプロへの登竜門とされ始めたことで番組打ち切り議論が発生したことに由来している。しかし、打ち切り前の最終企画として、全国61の放送局を動員して、各都道府県予選、地方大会を開催したことが「のど自慢」を存続させる転機を与えた。日本全国に存在する、声なき「のど自慢」ファンが殺到したのである。この出来事は、NHKが改めて全国各地に目を向ける契機となったに違いない。「全国には、マイクの前に立ちたいと切望する人々がこんなにたくさんいる。」公共放送を担う者として、NHKの放送番組が、放送文化と言えるほどの潮流を生み出していたことを自覚させられる瞬間だったと推測される。

ステージの中央に据えられたスタンド型のマイクは放送技術の進展によ

植田 康夫（代表）

り、ワイアレスのハンドマイクに形を変えた。当初は、直立不動、一点を見据えてひたすら唄うというスタイルが一般的だったが、現在では唄う人がマイクを持ちながら踊る光景もよくみられる。本稿では特に考察しなかったが、「のど自慢」は海外生活する人々、また海外に移住した日本人移民とその家族たちにも届けられるようになった。衛星で世界をつなぐネットワークが形成されたことが大きく影響している。研究会メンバーにも海外在住経験者がおり、日本ではあまり頻繁にチャンネルをあわせることがなかった「のど自慢」の放送を海外で視聴することで、日本社会と人々が持っている独特の雰囲気を感じる事が出来、これが日本へのある種のノスタルジーを感じさせることになったとの指摘もあった。基本的なスタイルを変えずにこれほどの長寿番組となった「のど自慢」については、さらに文化的な側面から多様なアプローチで研究する余地がたくさん残されている。まさに、「のど自慢」は日本の放送と大衆文化研究の宝庫であると言える。

本論文では、「のど自慢」に対する学術的な研究がみられないことから、社会科学的な見地に立つ「のど自慢」研究の地平を切り開くこととした。第一に、「のど自慢」の放送制作現場で何が起きているのか、参与観察を行なった。「のど自慢」の放送で感じられる、「のど自慢」らしさは、人間の出会い、ふれあい、そして互いに関わりあっている、という雰囲気、そして番組制作者サイドからの綿密な準備と仕掛けによって支えられている。「のど自慢」をメディア・イベントとして成立させるために、NHKの制作スタッフは、毎週、異なる場所と参加者と向き合いながら、全国各地の巡回を続けている。宮川アナウンサーが自著で指摘したが、単純計算では64年に1回、「のど自慢」は「私の町」にやってくる。東京、大阪、名古屋などの大都市でないところに、「のど自慢」がやってくれば、その地域の人々にとっては、一生に一回のメディア・イベントとして記憶される。ましてや、その時、ステージで歌うことができ、全国放送されるとなれば、「あの世にまで行って行きたい思い出」となる人もいよう。そのような思いを汲み取るべく、「のど自慢」の制作関係者は、地道な準備作業を日々続けている。常に新鮮な地域の元気を伝え続けていることが「のど自慢」の大きな筋書きであり、番組の制作者と受け手としての視聴者が互いに求める「のど自慢」の姿だと考えられる。

また「のど自慢」を放送するNHKが、視聴契約者としての個人に、自らの存在意義をアピールする場と位置付けていることも感じられた。「のど自



慢」の開催にあたっては、管轄の地元NHK放送局経営首脳が必ず姿をみせ、収録会場では、直接、出場者や観覧客に対して挨拶をする。公共放送局としての存在意義が、いろいろな意味で問われている現在、NHKが「のど自慢」の現場から学べることは多い。人の顔が見える場で、どのように振舞うのか。その場から、どのような仕掛けで、地域社会との一体感を生み出してきたのか。60年継続してきた「のど自慢」が「放送文化」の一端を担うようになっていることからみても、「のど自慢」の現場で何が起き、どのようなふれあいやつながりが発生しているのかについて、さらに考察を深めることが望まれる。

本研究では「のど自慢」を客観的に捉える試みも行なった。制作現場に観覧者として関わることなく、ただテレビの画面の前に座った視聴者が、どのような内容を受け止めることになるのか。この研究課題について、時期は限定されたが、22本の「のど自慢」番組を分析し、テーマを見つけ出した。現在、「のど自慢」を担当している宮本アナウンサーは、「のど自慢」を「筋書きのないドラマ」と呼んでいるが、実は、番組としての基本的なテーマ、視点は定まっていると言える。それは「のど自慢」に出場する個人それぞれに、どのような意味を与えているかを考察した結果として導き出された。それは、人生の演出装置、歌という贈り物、明るく元気な人生、地元の産業・文化、盛んな交流の5カテゴリーに代表される。これらは、最終的に「ポジティブな人生」「明るいコミュニティ」を表現する要素としてまとめることができる。これは、参与観察の中からも読み取れた、出会い、ふれあい、関わりあいによる番組制作の方針とも一致する。しかも、番組のテーマにもつながる、一体感をもって、前向きに表現しようとする制作側のアプローチが、画面から伝えられていることが確認された。

地域開催という特性を持つ「のど自慢」は、開催地の魅力を肯定的に伝える役割を担っている。言い換えれば、その役割を担うことのできる人が出場者として選ばれている。番組内容分析では、地域から発信される強烈なポジティブメッセージのパッケージとして放送され続けていると結論付けたが、これは一般の放送番組が必ず設定する、視聴者ターゲットや番組の全体像について、視聴者に活力を与え続けるという意味で、「のど自慢」の営みを否定的に捉えるものではない。還暦を迎えた長寿番組として、視聴者に愛されてきた背景には、「のど自慢」が発信している不滅のメッセージを肯定的に

植田 康夫（代表）

受け入れる視聴者が存在し続けている。「のど自慢」の送り手と受け手の間で相互作用が確認できる限り、多メディア、多チャンネル時代、インターネット時代、ブロードバンド社会が到来しても、この番組は日本の放送文化の中心的な存在であり続けるだろう。

〔金山 勉〕